

情報アクセシビリティ フォーラム事業報告書

一般財団法人 全日本ろうあ連盟

東京都・秋葉原UDX
2013年11月22～24日

はじめに



一般財団法人全日本ろうあ連盟
理事長 石野 富志三郎

本書「情報アクセシビリティ・フォーラム事業報告書」は、11月22日～24日まで、東京・秋葉原にて開催された「情報アクセシビリティ・フォーラム」の実施内容をまとめたものです。本フォーラム開催にあたって、官公庁をはじめ多くの団体のご後援と、「全国労働者共済生活協同組合連合会（全労済）」及び「埼玉県民共済生活協同組合」のご助成、そして多くの関係者の皆様より多大なるご支援を頂きましたことを、心より御礼を申し上げます。

お陰様をもちまして、本フォーラムは3日間で延べ13,236人の方々にご来場を頂くことができ、また、22日には安倍昭恵首相夫人のご臨席、23日・24日と連日にわたって秋篠宮妃殿下の御成りをいただき、更に24日には佳子内親王殿下にも御成りを頂くことができました。この成功は皆様のお力添えあってのことです。本当にありがとうございました。

「アクセシビリティ」という言葉は、まだまだ新しい、一般にはなじみの薄い言葉ですが、これまでの「情報にアクセスする」という考えに加え、「誰でも情報にアクセスしやすい」ことが重要になります。単に情報にアクセスできればいいのではなく、必要な情報を、より簡単により便利に入手できることが大切であるということです。

私たち聴覚障害者にとって「情報へのアクセス」は、自らの社会参加を左右するにとどまらず、時に生命をも左右するものです。情報を、私たちの望む形で、より分かりやすく・より簡単に入手することができる社会となるよう、これからも各方面に働きかけていく所存です。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

目次

はじめに	1
目次	2
1. 開催要項	3
2. 実施内容	4
2.1 企画趣旨	4
2.2 参加者人数	4
2.3 会場レイアウト	5
3. 映像エリア	6
4. 展示エリア	12
5. 会議エリア	20
5.1 国際ワークショップ	21
5.2 情報アクセシビリティ・カンファレンス	26
5.3 情報アクセシビリティ・ワークショップ	29
6. セレモニー・主なご来賓	35
7. 運営体制	38
(1) 実行委員会	38
(2) 準備室	39
(3) 要員	39
(4) 情報保障	40
(5) 広報	42
(6) コミュニケーション支援ボード	44
8. 来場者アンケート結果報告	46
9. フォーラム開催を報じる報道記事より	48
10. 成果と課題、そしてこれから	51

1. 開催要項

名称	情報アクセシビリティ・フォーラム 音をつかむ 未来をつかむ
会期	映像エリア 2013年11月22日(金) 13時～18時 2013年11月23日(土) 10時～21時 2013年11月24日(日) 10時～18時 会議エリア 2013年11月23日(土) 10時～17時 2013年11月24日(日) 10時～15時 展示エリア 2013年11月23日(土) 12時～18時 2013年11月24日(日) 10時～15時
場所	東京都千代田区・秋葉原 UDX (あきはばらユーディーエックス) UDX カンファレンス、UDX ギャラリー、UDX ネクスト、UDX シアター
主催	一般財団法人全日本ろうあ連盟
特別協力	公益財団法人日本財団/国立大学法人筑波技術大学
後援 (順不同)	内閣府/総務省/外務省/文部科学省/厚生労働省/経済産業省/国土交通省/東京都/日本障害フォーラム/公益財団法人共用品推進機構/公益財団法人交通エコロジー・モビリティ財団/一般社団法人日本経済団体連合会/日本商工会議所/全国中小企業団体中央会/一般財団法人日本 ITU 協会/一般社団法人情報通信ネットワーク産業協会/一般社団法人情報通信技術委員会/一般社団法人電子情報技術産業協会/一般社団法人電気通信事業者協会/日本放送協会/一般社団法人日本民間放送連盟/全国文字放送・字幕放送普及推進協議会/社会福祉法人朝日新聞厚生文化事業団/公益財団法人日本テレビ小鳩文化事業団/公益財団法人テクノエイド協会/一般社団法人日本補聴器工業会/一般社団法人日本補聴器販売店協会/国際ユニヴァーサルデザイン協議会/一般社団法人映画産業団体連合会
協力団体 (順不同)	一般社団法人全日本難聴者・中途失聴者団体連合会/社会福祉法人全国盲ろう者協会/一般社団法人全国手話通訳問題研究会/一般社団法人日本手話通訳士協会/社会福祉法人全国手話研修センター/NPO 法人 CS 障害者放送統一機構/NPO 法人全国聴覚障害者情報提供施設協議会/NPO 法人全国要約筆記問題研究会/日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan) /住友商事株式会社/株式会社講談社/パイオニア株式会社/株式会社電通

2. 実施内容

2. 1 企画趣旨

近年、障害者権利条約で最も重要な用語として「アクセシビリティ」があり、わが国でも情報アクセスや施設のアクセス等を包含する概念として紹介されていますが、残念ながらまだ市民の十分な理解を得るに至っていないのが現状です。とりわけ、聴覚障害者の情報アクセスは、視覚からの情報が非常に重要ですが、聴覚障害者が抱えているバリアが目に見えないだけに理解が進まない状況に置かれています。

聴覚障害者の通信手段や映画、地上波放送のデジタル化等に伴うテレビ等の字幕普及は急速な発展を見せています。あらゆる情報への文字や手話による情報アクセスのバリアフリー化は聴覚障害者のみならず、他の障害者や健常者に対しても大変有効です。

アクセシビリティの理念を市民に広めるため、現在の聴覚障害者を取り巻くアクセシビリティの啓発事業を行い、情報バリアフリー社会の醸成を目指して行きます。

2. 2 参加者人数

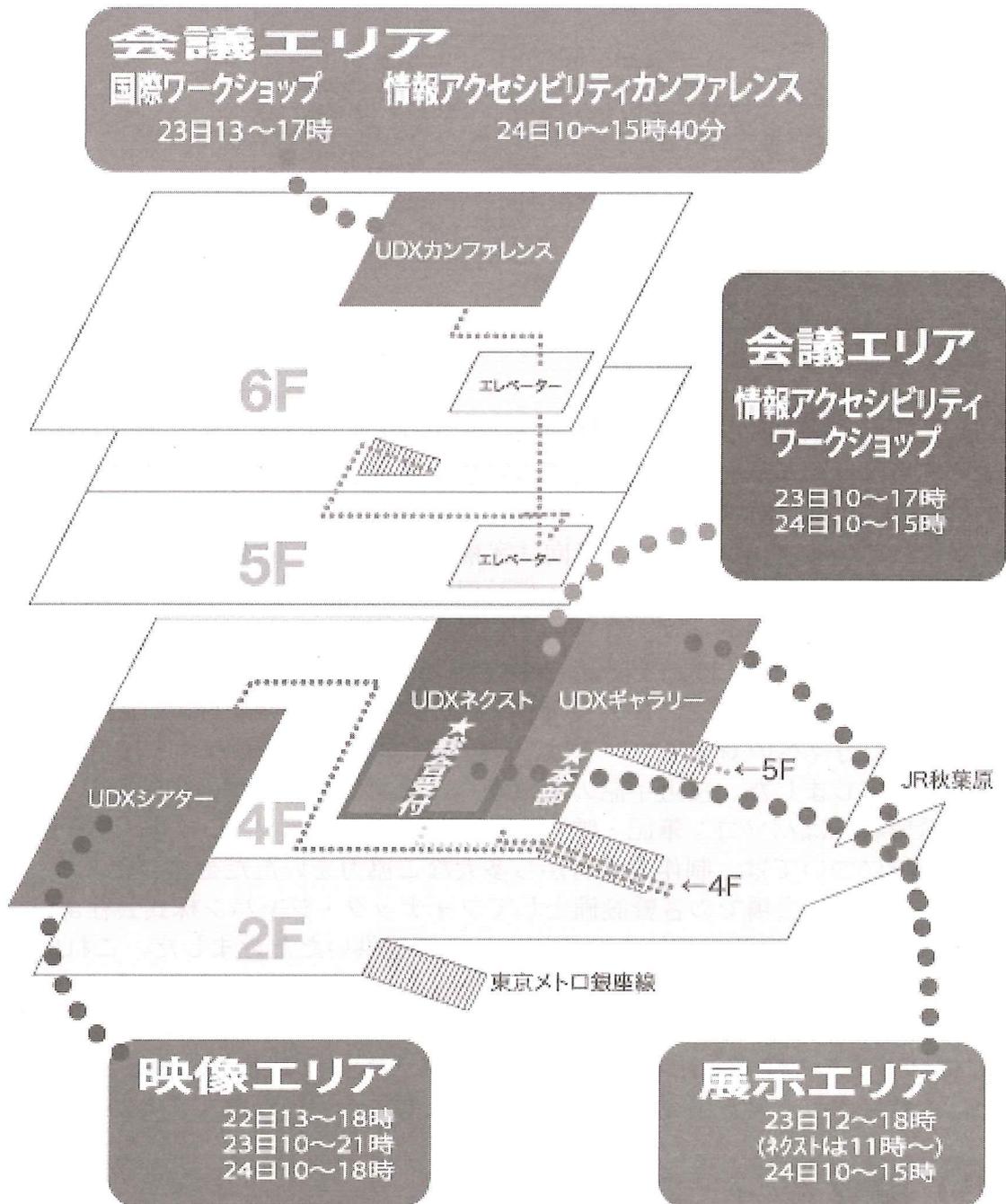
3日間 のべ13,236人

		22日	23日	24日	計
映像エリア	計	298人	582人	381人	1,261人
展示エリア	計		4,565人	3,880人	8,445人
会議エリア	計		1,750人	1,780人	3,530人
	総計	298人	6,897人	6,041人	13,236人

2. 3 会場レイアウト

秋葉原 UDX 東京都千代田区外神田 4-14-1

4階	UDX シアター	映像エリア会場
	UDX ギャラリー、UDX ネクスト 2、3	展示エリア会場
	UDX カンファレンス、UDX ネクスト 1	会議エリア会場



3. 映像エリア

映像エリアでは下記3点をコンセプトに映画上映と講演によるプログラムを構成しました。

- ・ 聞こえない人も楽しめる映像メディアを考えます。
- ・ ろう者の生活が描かれた映画作品を鑑賞します。
- ・ ろう者の視点で創る「デフムービー」を思い描きます。



<映像エリアのロゴマーク>

11月22日(金)		11月23日(土)		11月24日(日)	
10時～ 12時		「Braam Jordaanの世界 : 無声アニメーションの新しい風」		「Braam Jordaanの世界 : 無声アニメーションの新しい風」	
13時～ 15時	映画(4) 「小さな下町-さくらの詩-」	講演(2) 「映像メディアを考える ～ろう者が見やすい字幕とは～」		講演(3) 「映画に見るろう者の 生活文化と社会観」	
16時～ 18時	講演(1) 「映像メディアを考える ～無声映画から発声映画へ～」	映画(1) 「舟を編む」		映画(3) 「たき火」	
19時～ 21時		映画(2) 「生命のことづけ」「音のない3. 11」「紡ぐ TUMUGU」			

映像エリアでの情報アクセシビリティについて

映像エリアでは日本手話と日本語の情報保障を基本とし、下記のように対応しました。

映画プログラムでは、すべて日本語の字幕が付いている映画を上映しました。また、映画の中で使用されている言語（聴覚障害者向け字幕、翻訳字幕、日本手話、音声日本語、音声ガイド等）についてプログラムに明示し、事前周知を図りました。

講演プログラムやゲストトーク、司会進行時には手話通訳、パソコン筆記による文字情報保障を提供しました（一部、国際手話通訳を配置）。また、手話話者の映像、パソコン筆記の文字、講演資料をスクリーンに拡大表示し、どの席からも見やすいよう配慮しました。

盲・弱視ろうの方々への対応については、情報保障本部と連携しながら接近手話1件、拡大文字2件に対応しました。接近手話の希望者へは通訳の配置と事前の映画シナリオ送付、拡大文字の希望者へはパソコン筆記・映画字幕の個別表示用パソコンの貸出を行いました。映画の情報保障については、制作関係者から多大なご協力をいただきました。

3日間をとおして、会場での音響設備としてフォナック・ジャパン株式会社より「フォナック DSF システム（線音源スピーカー使用）」をご提供いただきました。これにより、すべての座席に明瞭な音を届けることができ、補聴器・人工内耳ユーザのニーズにも対応できました。

23日にはパイオニア株式会社より「体感音響システム」をご提供いただき、10席に設置しました。これにより、音を振動に変えてお客様に楽しんでいただくことができました。

講演（1）「映像メディアを考える

～無声映画から発声映画へ、ろう者コミュニティと映画の関わり～」

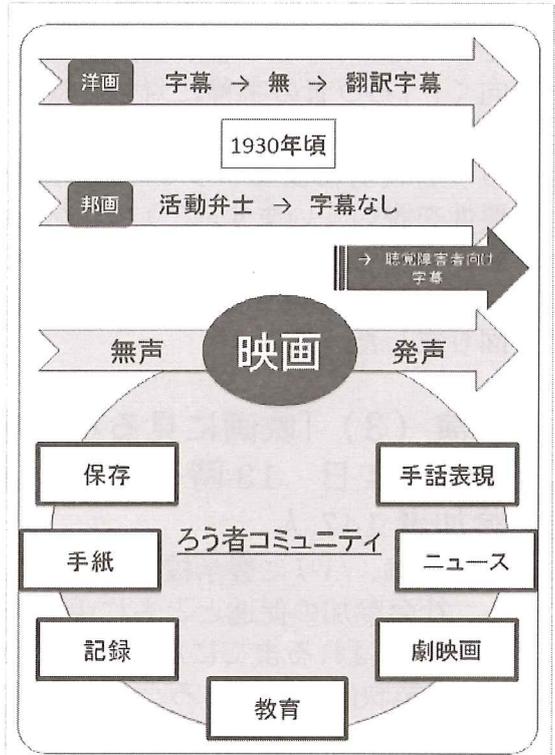
11月22日 16時～18時 講師：大杉 豊氏（筑波技術大学准教授）

参加者 131人

講師はまず1930年前後に無声から発声（トーキー）方式へと大きな変化のあった映画の歴史を簡潔に紹介し、洋画と邦画それぞれに字幕に関してどのような変化があり、それがろう者コミュニティにどのような影響を及ぼしたかを解説しました。日本人ろう者から見ますと、発声方式への変化以降、洋画は翻訳された字幕で接近性が高まったのに対し、邦画は字幕なしと接近性が低まったまま、聴覚障害者向け字幕の登場を50年間以上も待つことになったとのことでした。

続いてろう者コミュニティが映画（フィルム）をどのような目的で活用して来たのかについて、手話の保存、手話表現、手話による手紙、手話によるニュース、手話の記録、ろう者の劇映画、教育目的の映画など日米の例が数編紹介されました。現在も各分野でろう者の映画作りへの挑戦が続いており、その1つの例として2004年に始まった

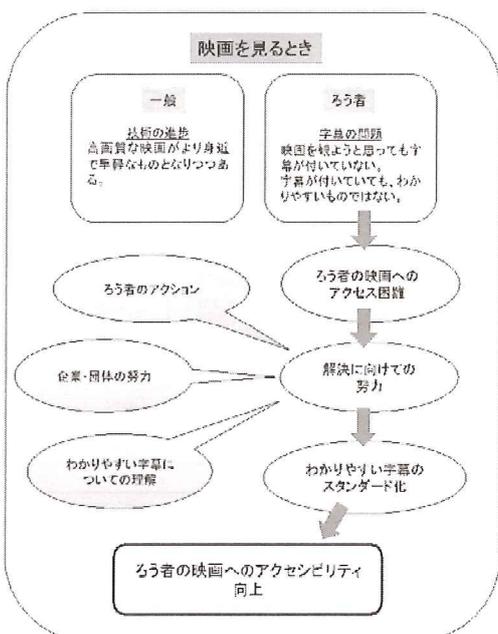
「さかの聴覚障害者映像祭」に出品された無声短編映画「僕と彼女と碁盤の幽霊（伊藤徹也）」の上映がありました。



講演（2）「映像メディアを考える ～ろう者が見やすい字幕とは～」

11月23日 13時～15時 講師：重田 千輝氏（筑波大学大学院）

参加者 148人



現在、iPhone やブルーレイディスク等の技術進歩により、高画質な映画がより身近で楽しめる物になりつつあります。しかし、ろう者が映画を観ようと思っても字幕が付いていなかったり、たとえ字幕が付いていても、ろう者が十二分に理解できる字幕は少ないという現状があります。このように一般社会においては映画が益々魅力的なコンテンツになりつつあるのに対し、ろう者はなかなか映画に接近しづらい状況にあります。このことからろう者にとって字幕、それもわかりやすい字幕の付与がスタンダードになることが求められています。そのようなニーズに応えるため、あらゆる企業・団体が奮闘し、ろう者にとってわかりやすい字幕「聴覚障害者対応日本語字幕」が広まりつつあります。「聴覚障害者対応日本語字幕」は従来の字幕（翻訳字幕）とは異なり、ろう者があらゆる情報を得られるように様々な工夫

が散りばめられています。

この「聴覚障害者対応日本語字幕」を製作している団体の一つ、メディア・アクセス・サポートセンターの理事長である山上徹二郎氏は、この字幕がスタンダードなものとなっていくため、「ろう者が映画館に向く」「ろう者の字幕に対する意見を制作側に伝えていく」といった、ろう者自身によるアクションの必要性を説いています。こういった実態や考えを提供し、ろう者にわかりやすい字幕に対する理解の深化を図りました。



講演（3）「映画に見るろう者の生活文化とろう者観」

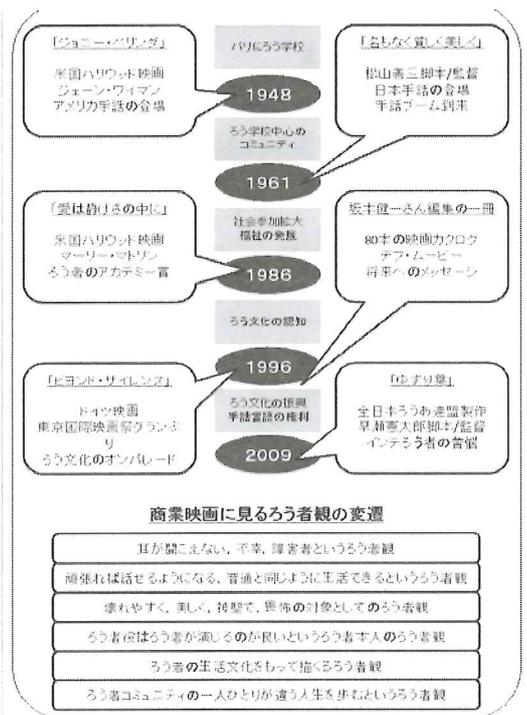
11月24日 13時～15時 講師：大杉 豊氏（筑波技術大学准教授）

参加者 147人

講師は、パリに聾学校が創立されて以来、ろう学校を中心にろう者のコミュニティが発展し、社会参加の促進とともに手話を含むろう者の生活文化の認知も進み、手話言語に関する権利が叫ばれるまでになっている世界的な流れの中で、3本の商業映画の内容と背景を解説し、商業映画におけるろう者の生活文化とろう者観の描写がどのように変化して来ているかを論じました。戦後間もなく封切られた「ジョニー・ベリンダ」はろう者を孤立の象徴として描写していますが、この映画に示唆を受けて松山善三氏が監督した作品「名もなく貧しく美しく」はろう者の生活文化の大変さに迫り、ろう者コミュニティからも一定の評価を得ています。

さらに時代が進んで1996年に製作された「ビヨンド・サイレンス」はろう者の生活文化の豊かさが積極的に描写された作品として、ろう者コミュニティの一人ひとりが一般の人々と同じようにそれぞれの人生を歩んでいる様子を描写する流れとなっています。

各作品とも製作された当時の社会背景とともにろう者や手話の存在がどのように見られていたのかを知る上で、私たちにとって貴重な文化財産であることが最後に強調されました。



講演（4）「Braam Jordaan の世界：無声アニメーションの新しい風」

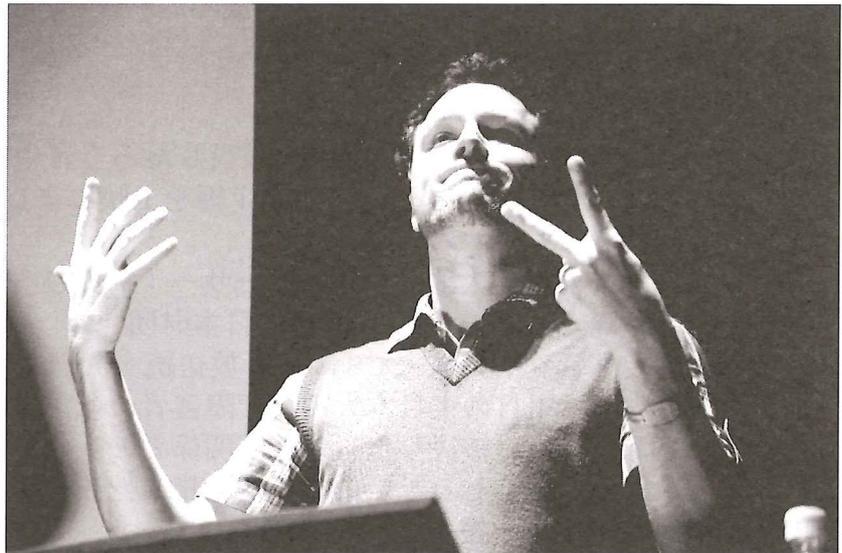
11月23日 10時～12時

11月24日 10時～12時 講師：ブラーム・ジャダーン氏

参加者 23日 138人 24日 63人

筑波技術大学教員の研究助言者として招聘された講師 Braam Jordaan（ブラーム・ジャダーン）氏は南アフリカ出身のろう者で、BMW や三菱など企業からの依頼を受けて、アニメーションやコンピューター・グラフィックでコマーシャル映像を作るプロフェッショナルとして知られています。アニメーションでは「The Rubbish Monster」という1分間の作品がもっとも知られており、この作品は英国ケンブリッジ大学出版局から絵本として出版されました。

本講演では、同氏が自分の生い立ちを紹介したあと、今までに同氏が製作した映像作品数編が紹介され、参加者は手話を使う温かみのあるアニメ・キャラクターや、視覚効果が活かされたろう者の目線による映像に圧倒されたようです。アンケート回答でも子どもが手話を学ぶ教材として手話アニメーションを活用してほしいという意見が圧倒的にあり、自由記述で見られた主な意見は下記の通りです。



（原文のまま）

- ・ 手話をアニメ化するのは、表情や口の中(舌とか)の細かい動きがあり、無理だという思い込みがあったのを破られたのでとても大きな衝撃を受けました。
- ・ 表情の描き方が丁寧で見やすい。ただ表現するのではなく、手話の文法も盛り込まれていて日本の手話アニメーションはまだだと感じた。
- ・ わかりやすく、又メッセージ性が伝わってきてよかった。特に手話をするライオンや未来を描いたものが素晴らしく、ぜひ日本手話を操るキャラクターを見てみたい。楽しくて動きがスムーズで素晴らしい。
- ・ ほんとにすごいなあと思いました。ほんとに手話表現力を出ていたことは、今まで手話指導者として やっていたことを深く反省しています。2Dでなく3Dが必要だとわかりました。手話ではなく人間として手話言語だと呼びかけていきたいと思います。

映画（1）「舟を編む」 11月23日 16時～18時

参加者 131人

原作：「舟を編む」三浦しをん（光文社刊） 監督：石井裕也 脚本：渡辺謙作
製作：「舟を編む」制作委員会 2013年製作

映画のバリアフリー化に取り組んでいます住友商事のご提供による最新作で、視覚障害者向けの「音声ガイド」と聴覚障害者向けの「日本語字幕」が付いています。

2012年本屋大賞で第一位に輝いた、三浦しをんの著作『舟を編む』を映画化したものです。玄武書房営業部内で変人扱いされていた馬締は、ある時編集部に移動され、辞書編集の仕事に出会う。次第にその魅力にとりつかれていくが、編集部の他のメンバーとの関わり方で悩んだり、恋心を抱く隣人のことで仕事に手がつかなくなったりする。そんな不器用で誠実な馬締を描いたドラマです。

映画（2）「生命（いのち）のことづけ」

「音のない3・11 ～被災地にろう者もいた～」

「紡ぐ TUMUGU」

11月23日 19時～21時

参加者 161人

このプログラムでは、東日本大震災で被災したろう者や盲ろう者の生活を追った作品2編と、盲ろう者の普段の生活を追った作品1編を上映しました。

「生命（いのち）のことづけ」

監督・脚本：早瀬憲太郎 プロデューサー：梅田ひろ子

制作：日本障害フォーラム（JFD）、日本財団

製作：特定非営利活動法人CS 障害者放送統一機構、目で聴くテレビ 2013年製作

2011年3月11日の東日本大震災で障害者の死亡率が健常者の2倍以上であったという事実を取り上げ、被災した当事者や関係者の生の声を映し出し、障害がある人もない人も共に安全に暮らせる社会の構築を目指した作品です。

「音のない3・11 ～被災地にろう者もいた～」

監督：今村彩子 取材・撮影・編集：今村彩子・渋川和憲

制作・著作：目で聴くテレビ 2012年製作

東日本大震災において被災から避難所生活を経て仮設住宅に移った菊地信子さんの一年間の撮影を通して、被災したろう者の状況や立場、そこから抱える苦悩がリアルに映し出されている作品です。

本作品の上映後、今村監督をゲストに迎え、司会者とのトークショーを行いました。監督からは、「被災したろう者の生の声を、同じろう者の視点から観客にダイレクトに伝えたい」と

いう製作に懸けた想いや、今回の取材で「命にかかわる情報に格差があってはならない」と身を持って感じたことについてコメントがあり、今後もドキュメンタリー作品の製作を通してろう者に勇気や感動を届けたいという抱負が語られました。



「紡ぐ TUMUGU」

監督：谷進一 脚本：小西貴美子

製作：手話舞台「箱！」 2012年製作

京都府内で活躍する手話ユニット、手話舞台「箱！」が製作し、「さかの聴覚障害者映像祭」の第8回大会（2012年）において優秀賞に輝いた作品です。本作品では、盲ろう者への理解が深まるよう、一人の盲ろう者の一日の生活が半ドキュメント風に描かれおり、「触手話」によるコミュニケーションが紹介されています。

映画（3）「たき火」 11月24日 16時～18時

参加者 171人

監督：深川勝三 制作：聾聵映画演劇研究会（1972年）

脚色：おおだてのぶひろ 編集：高正次・おおだてのぶひろ 2013年製作

「楽しき日曜日」「三浦浩翁半生記」など8ミリフィルムの長編作品で知られ、日本のデフムービー（聾映画）作りの先駆者とされる深川勝三監督の遺作です。撮影終了後に監督が病に倒れたため、フィルムは手つかずのまま保存されていましたが、40年の歳月を経て、おおだてのぶひろ監督の手により作品として完成しました。北海道の片田舎から上京したろう青年が運命の渦に巻き込まれていくドラマの中に、奇縁そして家族の葛藤、青春、昭和時代のろう者の自立と成長が描かれています。国民に手話が普及し始めた昭和40年代の物語、当時の手話表現とともに、8ミリフィルムに「ろうあ者への理解と再認識を世間に示したい」というメッセージが込められ、時代を超えて手話の大切さを語りかけてくる作品です。

本作品の上映後、編集者の高正次氏（聾聵映画保存会）とおおだてのぶひろ監督をゲストに迎えて、トークショーを行いました。脚本は深川監督の頭の中にあり、それをひも解くように再編集がなされたこと、その結果、当時の関係者からも高い評価をもらったこと等、本作品の公開に至った背景について両氏より解説がなされました。



映画（4）「小さな下町・さくらの詩」 11月22日 13時～15時

参加者 167人

監督・脚本：おおだてのぶひろ 制作著作：デフ・ムービー・エンターテインメント プロデリア
協力：墨田区聴覚障害者協会他 2001年製作

日本のデフムービー「聾映画」の製作を牽引してきたおおだてのぶひろ監督の力作です。昭和25年、製作所に勤めるろう者の工員、田村勝は、当時の世間の障害に対する理解の無さに悩まされ、憤りを感じる。そんな勝がろう運動家の講演会で同じろう者の墨田さくらと出会う。様々な壁にぶつかりながらも、ろう協会の創立に奮起していく。そんな下町のろう者の人情を詳細に描いたヒューマンドラマです。

本作品の上映後、おおだてのぶひろ監督をゲストに迎えて司会者とのトークショーを行いました。当時の手話を調べて役者に当時の手話を交えながら演じてもらったこと、ろう者ということで撮影機器の借用を断れることが多く、また撮影場所の確保が困難だったこと等、撮影の苦労話についてお話いただきました。



※映像エリアのロビーに8枚のポスターを掲示しました。これらポスターは筑波技術大学障害者高等教育研究支援センターの「ろう者学コンテンツ事業」の一環として作成されました。下記サイトで閲覧することが出来ます。

<http://www.deafstudies.jp/info/res0005.htm>

4. 展示エリア

(1) 基本方針

- ①より多くの人達が参加しやすいように、アクセシビリティに配慮した展示をめざしました。
- ・「より多くの人参加しやすい展示会ガイド」は共用品推進機構のホームページからダウンロードすることができます。
http://www.kyoyohin.org/03_download/0302_guidelines.php#tenjikai
- ②安全・安心に配慮した展示を目指しました
- ・避難通路は見やすいように表示し、避難しやすくするために、十分な広さを確保すること、段差をなくすこと、邪魔になるものなどを置かないこと、などを守りました。
 - ・聴覚障害者も来場されますので、地震や火災などの災害の発生が、正しく、迅速に伝わる報知システムを工夫しました。
 - ・地震などが発生しても、物が落ちてきたり、崩れたりしないような展示をしました。
- ③環境（3R）に配慮した展示を目指しました。
- ・Reduce : 物を大切に使い、ゴミは出さないようにします。
※例えば、配布物などは最小限にし、ゴミは持ち帰っていただきます。
 - ・Reuse : 使える物は繰り返し使います。
※例えば、表示看板やユニフォームなどもレンタルや既存のものを活用します。
 - ・Recycle : ゴミが出たら正しく分別し、ゴミから再生されたものを活用します。
※例えば、省エネルギー製品やリサイクル商品（グリーン）などを購入・活用します。
- ④主催者（スタッフ・会場担当者を含む）と出展者や来場者だけでなく、会場近隣の人たちとも、「情報アクセシビリティ・フォーラム」の開催の目的を共有することを目指しました。
- ・例えば、会場の最寄駅である秋葉原駅や末広町駅には、「情報アクセシビリティ・フォーラム」の開催会場、日時、目的などを事前に説明し、来場者の円滑な案内や誘導の協力を依頼しました。
 - ・例えば、会場のあるUDXの中にあるレストランなどには、聴覚障害者が来店された時の円滑な対応を依頼しました。

(2) 出展ブース

出展ブースは以下の3タイプを基本としました。

Aブース：3m × 3m × 2.7m

Bブース：2m × 2m × 2.7m

Cブース：長机（1.8m）1脚のみ

(3) 出展者説明会の開催

2013年9月24日に、秋葉原の貸し会議室において、出展者を対象とした出展者説明会を開催しました。

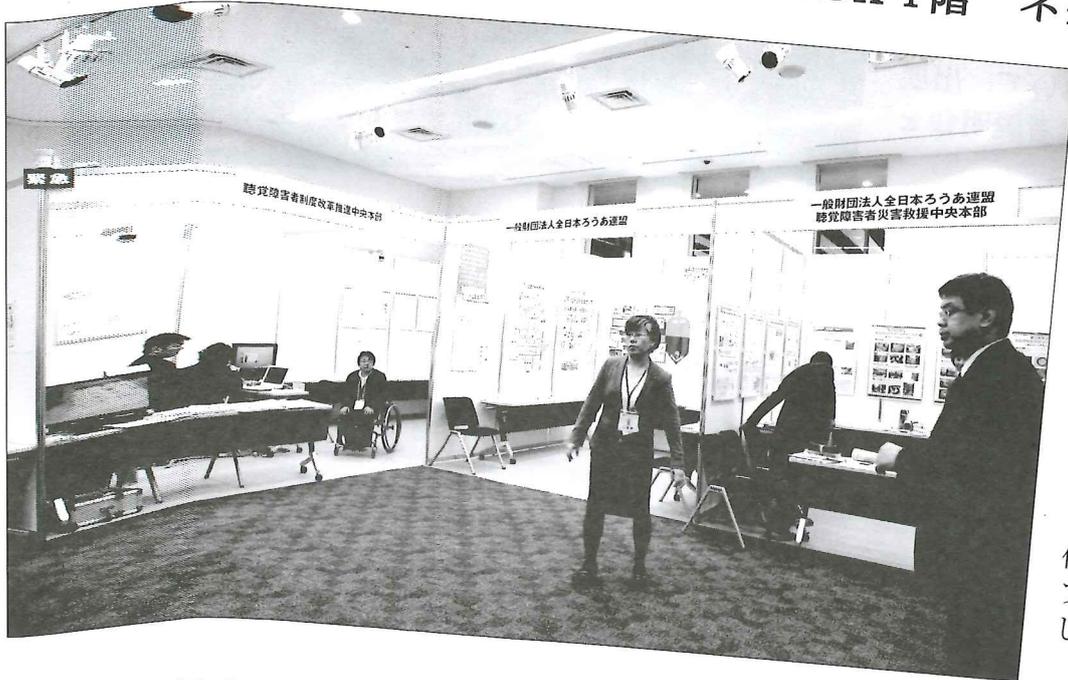


(4) 出展内容

<啓発・体験ゾーン> UDX ネクスト2

小間番号	看板表示	ブース実施内容
1	一般財団法人全日本ろうあ連盟	全日本ろうあ連盟の活動の紹介
1	聴覚障害者災害救援中央本部	防災関係のパネル展示・書籍販売等
2	一般財団法人全日本ろうあ連盟	福祉機器・コミュニケーションに関する展示
3	聴覚障害者制度改革推進中央本部	We Love コミュニケーション！運動・日本手話通訳士協会・全国要約筆記問題研究会パネル展示、書籍の紹介
3		
4 (1)	電話リレーサービス体験コーナー	電話リレーサービス体験
4 (2)	盲ろう者体験コーナー	<展示コーナー>聴覚障害者を主体とし、視力が低下した場合の説明や、支援機器をポスターや実践で紹介 <体験コーナー>盲ろう当事者による疑似体験（視覚の状態によって弱視・全盲・視野狭窄などを用意）
4 (3)	「防災手話教室・字幕作成・筆談体験コーナー」	字幕作成・筆談体験（入れ替え制） 防災手話教室（入れ替え制）

<啓発・展示ゾーン> / 秋葉原・UDX 4階 ネクスト2



啓発・展示ゾーン内に設置された展示ブースは下記①～③の3ブースです。

体験コーナーはオープンスペースで実施しました。

① 「一般財団法人全日本ろうあ連盟・聴覚障害者災害救援中央本部」ブース

全日本ろうあ連盟の紹介と、災害救援啓発のパネル、そして、全国各地で工夫を凝らして作成された様々な防災グッズを展示しました。



② 「一般財団法人全日本ろうあ連盟」ブース

公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構・東京都聴覚障害者連盟及び UDX 開催地の城東地区聴覚障害者団体懇談会の協力を得て、各地域でのアクセシビリティ関連の取り組み事例や福祉機器の紹介をしました。



③ 「聴覚障害者制度改革推進中央本部」ブース

情報・コミュニケーション法・手話言語法制定に向けた「We Love コミュニケーション！運動」の解説、日本手話通訳士協会、全国要約筆記問題研究会の展示、書籍の紹介を行いました。



④「電話リレーサービス体験」コーナー

百聞は一見にしかずということで、実際に電話リレーや遠隔手話通訳を体験していただくと共に、両者にどのような違いがあって、どういう点に留意しなければならないのか、分かりやすく説明しました。



⑤「盲ろう者体験」コーナー

〈展示コーナー〉聴覚障害者を主体とし、視力が低下した場合の説明や、支援機器をポスターや実演で紹介しました。

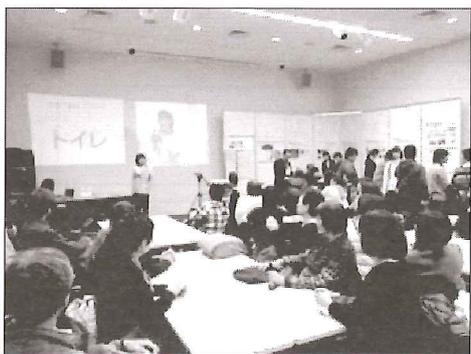
〈体験コーナー〉盲ろう当事者による疑似体験を行うため、様々な視覚（弱視・全盲・視野狭窄）を体験頂きました。



⑥「防災手話教室／筆談体験・字幕作成体験」コーナー

全国要約筆記問題研究会が筆談の体験や字幕作成の体験を行い、全日本ろうあ連盟（東聴連・城東地区）が「手話で防災」のテキストをベースにした防災手話教室を行いました。

11月23日は11時～17時の間、11月24日は10時～15時の間、それぞれ2時間サイクルで、①15分間：1回目の防災手話教室、②30分間：筆談体験、③15分間：2回目の防災手話教室、④1時間：字幕作成体験の繰り返しで開催し、多くの方に参加頂きました。



右奥が盲ろう者体験、左は防災手話教室です。



筆談のワークショップ



その場で撮影した動画に字幕を付ける体験です。クローズドキャプションで作成したものをDVD化し、体験者へお渡ししました。

◆パネリスト

- ・国際電気通信連合 アンドレア・J・サックス氏 (米国)
(アクセシビリティやろう者向けサービスに関する専門家、国際電気通信連合等のコーディネーター)
- ・ヨーロッパろう連盟 ジェフ・マックウィニー氏
(英国サインビデオ社社長)
- ・韓国情報化振興院 チェ・ワンシク氏、キム・ビョンオク氏
(韓国の電話リレーサービスを推進する公的組織のディレクター、実務担当者)
- ・タイ・テレコミュニケーション・リレーサービス
ソミオス・スンドラビバット氏、ウィタユート・ブンナグ氏
(タイの電話リレーサービスを推進する公的組織のディレクター、アドバイザー)
- ・筑波技術大学准教授 井上 正之氏

- ・司会 日本財団 公益・ボランティア支援グループ長 石井 靖乃氏

◆【第一部 国内外の電話リレーサービスの状況】

第一部では参加各国のパネリストによる電話リレーサービスの実情報告がされました。各発表者の要約を以下にご紹介します。

(1) 米国 アンドレア・J・サックス氏



「アメリカでは1970年頃から電話リレーサービスが始まり、世界で一番古い歴史と最大の内容・規模をもちます。私の父はろう者で、私自身はいわゆるCODAでした。父はアメリカで初めての電話リレーサービス実現に尽力し、その後も多くの人々の努力で今では数多くの方が電話リレーサービスの恩恵を受けています。文字やビデオによるリレーサービスに加え、話せるが聞こえない人向けには、自分の声で話し相手の音声は電話機のモニターに字幕で表示されるCapTelというサービスもあります。このように電話リレーサービスはろう者、難聴者、盲ろう者、言語障害者などさまざまな障害の人が使っています。電話リレーサービスがあることによって、『リアルタイム』で聞こえる人たちの世界とつながることができ、それは子ども、家族、友達に頼らなくても電話ができるという聴覚障害者の自立につながるのです。」

(2) EU(ヨーロッパ) ジェフ・マックウィニー氏



「欧州ではスウェーデン、ドイツ、イギリス、スイス、フランス、ノルウェー等ですでに電話リレーサービスが始まっています。スウェーデンは電気通信法、ドイツも電気通信法、英国は平等法、このような法的な根拠を持って電話リレーサービスが進められているのです。電話リレーサービスの効果として、例えば自分で独立して起業するろう者が増えました。またろう者が管理職として仕事ができるようになり、そのことによってろう者が採用される数も増えたことが挙げられます。そして、それにあわせて手話通訳者の技術も向上しました。」

(3) 韓国 チェ・ワンシク氏、キム・ビョンオク氏



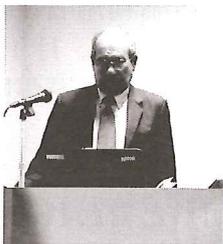
「韓国の場合は、障害者に向けた施策というよりも国民のデジタル格差解消の一環として電話リレーサービスが2004年に始まりました。今の状況は、全て無料、24時間・365日、電話リレーサービスが行われています。アメリカと同じように文字でのサービス、手話を使ったビデオリレーサービス、音声でのサービスなどがあります。携帯、スマートフォンのアプリを使っての通信もできます。

また、107という統一電話番号でサービスが使えるということです。2012年には、年間52万件の利用があり、その数は今も増加しています。」

(4) タイ ソミオス・スングラビバット氏、ウィタユート・ブンナグ氏



「参加国の中では公的電話リレーサービス最後発のタイは、NCCという官庁が電話リレーサービス部門を立ち上げています。サービスが始まったのは、2011年です。通信事業会社から電話リレーサービスの運営のお金を徴収しています。サービスの内容は、全部で6つの方法があり、興味深いと思われるのはキオスクという、日本で言えば公衆電話のような端末でもすべてのサービスを提供していることです。また年に一度は利用者からのヒアリングを行い、機能改善やニーズの掘り起こしに努めています。タイはネットワーク事情が悪く、特に地方でサービスが十分展開できないという悩みをかかえています。」



(5) 日本 井上 正之氏



「日本の状況は遅れています。日本でも電話リレーサービスは2000年頃から始まりました。公的ではなく民間会社が起こしたものです。ただ努力をし続けても、資金の問題があり、1~2年くらいで止めてしまうことが多いのです。それでも今、いくつかの会社が電話リレーサービスを行っています。そうした中、今年の9月から来年3月まで日本財団での試験サービスが始まっています。

文字と手話、2つのリレーサービスの方法がありサービスを使う費用は無料ですが、通信費は自己負担です。24時間365日ではありませんし、聞こえない人からだけの通信という問題も残っています。このように課題だらけの日本といった状況です。」

最後に、アンドレア・J・サックス氏から、ITU（国際電気通信連合）の国際的規範・基準の報告が行われました。

(6) ITU（国際電気通信連合） アンドレア・J・サックス氏

「ITUは国連組織の一部で、国際通信の標準化の活動を行っています。その中で電話リレーサービスについても、ろう者の方々が不自由なくコミュニケーションでき

るように、世界的な標準化が必要です。23 年間努力してきましたが、道のりはまだまだ遠く、日本も含めた世界中の人々の手助けを必要としています。」

◆【 第二部 パネルディスカッション 】

第二部ではパネリスト全員で、会場からの質問も交えながらパネルディスカッションが行われました。

電話リレーサービスがろう者にとっていかに大切かについて、英国のマックウィニー氏は、「ビデオリレーサービスがあったからこそ自分も起業ができた、政府や省庁、銀行とも連絡がとれるようになり、今では 51 人の会社を経営している」とこのサービスが自分の人生を変えるきっかけになったことを語りました。また、タイのブンナグ氏も、「電話リレーサービスのおかげで、料理の注文やコンロの修理依頼などが簡単にでき、毎日の生活が本当に便利になった」と生き生きと話しました。

法的な整備や運営資金にかかわるディスカッションでは、韓国は国の情報化戦略のひとつとして、情報アクセスの均等化を図り法的根拠の整備がなされています。電話リレーサービスをするための資金は当初国がすべて負担していましたが、通信事業会社との 3 年がかりの粘り強い交渉の結果、通信料に関しては通信事業会社に拠出してもらえることになったのです。また、アメリカでは州レベルで電話利用者に 1 ヶ月 15 セント（約 15 円）程度の課金があり、サービスの費用に充てられます。月 15 セントというあまり負担感がない形で聴覚障害者の電話リレーサービスの費用が賄えているのです。

会場からの「代理で電話をすると、時々『本人でないと不可』と言われるが、海外ではどうか？」、という質問に対して、英国にはすべての人に平等なアクセスを保障する平等法と連絡者の本人確認のための保護法と言う一見相反する法律があるが、両法を適切に解釈することによって障害者の要求に対処できるようになってきたとの答えがありました。

各国のパネリストからは、「日本は経済・技術の面で先進国であり、その気になれば電話リレーサービスはすぐにもできる。官民が協力してとにかくやってみればよい」という励ましの言葉を口々にいただきました。日本の井上氏は「1886 年にベルにより電話が発明された時、翌年にはもう日本に電話が輸入されていたのです。にもかかわらず、こと電話リレーサービスに関しては、日本の聴覚障害者のアクセシビリティはほとんど進んでいません。この機会に電話リレーサービスを本当に普及させたく、どうすればできるのかをぜひ今後皆さんと一緒に考えていきたいと思います」と語り、4 時間にわたる国際ワークショップを締めくくりました。

なお、最後になりましたが、6 言語が使用されたこの国際ワークショップを情報保障コンサルタントとして見事に支えてくださった筑波技術大学 河野純大先生と塩野目剛亮氏に感謝の意を表します。

◆【アンケートより】

会場では、電話リレーサービスに関するアンケートを実施し、27名の方から回答をいただきました。以下に要約をご紹介します。

ほとんどの方から「大変よい」、「よい」と高い評価をいただきました。

主なコメント 電話リレーサービス先進国からきていただき実際の話が聞けたのがよかったです。
通訳が大変だったと思うが、このようなワークショップは貴重な体験でした。
国際的なディスカッションは初めて。素晴らしかった～、拍手！！

2. 海外事例で最も印象に残った国・内容は？

手話で自らの体験をいきいきと話されたタイとEUの話が興味深いというご意見が多数ありました。

主なコメント タイ キオスクタイプのビデオリレーサービスが面白い。
韓国 隣国で短期間に電話リレーサービスを普及を進めたこと。
英国 リレーサービスがろう者の起業、雇用につながったこと。
米国 アメリカは進んでいると思っていたがここまでとは。

3. 電話リレーサービスは聴覚障害者にとって必要だと思うか？

こちらもほとんどの方が、電話リレーの必要性を強く感じています。

主なコメント 「障害者の自立」という考え方につながる。
気を使わずに、自分の時間に利用できる。

4. もし今電話リレーサービスがあれば使ってみたいと思うか？

9割をこえる方が使ってみたいと思っておられ、ニーズは強いものがありそうです。

主なコメント わざわざ市役所とかに行かずに家で使えるので便利。
命にかかわるようなことには怖い（「あまり思わない」と書かれた方）

5. 日本で電話リレーサービスが普及しない最大の原因は何と思うか？

法律・条例と運営資金が上位を占め、要員育成、当事者の意識もあげられています。

主なコメント そもそも健聴者で知っている人がいるのか。認知が不足。
民間会社だけでやっていることに無理がある。

6. 日本で電話リレーサービスを普及させるために最も有効と考えられることは何か？

まずは電話リレーサービスの存在をPRさせるという意見が多数を占めました。

主なコメント 当事者が声をだす。
啓発活動。宣伝。
システムとして全体を構想してゆくこと。

5. 2 情報アクセシビリティ・カンファレンス

5. 2. 1 「音のない世界～心のふれあいから聞こえてくるもの～」

・講師：早瀬 憲太郎氏

・講師プロフィール：

ろう児対象の学習塾「早瀬道場」を設立して塾長に就任、フリースクールなどを通じて、ろうの子ども教育に関わられています。また、映画等の制作にも携わり、2008年には、全日本ろうあ連盟創立60周年記念映画『ゆずり葉』の脚本・監督も務められました。現在は、NHK「みんなの手話」の講師としても活躍中です。



・講演概要：

参加者は340名で、立ち見も多く入場をお断りせざるを得ないほどの盛況となりました。講師自らの経験をもとに、情報アクセスの問題は耳が聞こえない人たちだけの問題ではなく、一般社会にいる聞こえる人たちのほとんどが「耳が聞こえない世界」「社会には耳が聞こえない人がいる」ということを全く知らされておらず情報不足になっているかと指摘されました。

そして、耳が聞こえないということは決して不幸ではなく無限の可能性があることも含めて一般社会の聞こえる人々へ伝える努力をしていくべきであることを力強い手話で話され、聴衆一同の大きな共感を呼びました。



5. 2. 2 「電話リレーサービスの始まるまでとその後」

・講師：アンドレア J. サックス氏

・講師プロフィール：

ろうの両親の娘（CODA：Children of Deaf Adults）として、電話リレーサービス普及のため様々な活動に関わってこられ、現在は、ITU-T JCA-AHF（アクセシビリティと人間工学共同検討チーム）議長として活躍されています。

・講演概要：

参加者は320名で、立ち見が出る盛況となりました。CODAとして生まれ育ち、電話リレーサービス創設者の一人である父親の活動を間近に見てきた生い立ちを語りつつ、電話リレーサービスの登場により聴覚障害者の生活が大きく変化・向上してきたこと、国際リレーサービスの実現には聴覚障害者等の当事者が参加しての標準化が欠かせないことを訴えられ、最後に聴覚障害者の自立と生活の質の向上及び社会貢献の拡大に向けてリレーサービスが不可欠であることを述べ、電話リレーサービス後進国である日本へ力強いエールを送られました。



5. 2. 3 「Google アクセシビリティ・ユーザビリティに関わる国際サミット会議」

・講師：井上 正之氏

・講師プロフィール：

国立大学法人筑波技術大学准教授として、聴覚障害を持つ学生への情報通信技術教育に携わるかたわら、特に聴覚障害者の立場からの情報通信サービスのアクセシビリティ向上に向けた技術・施策の研究に取り組んでいます。



・講演概要：

2013年9月に米国・カリフォルニア州のGoogle本社で開催された「Google Global Summit on Accessibility and Usability(Google アクセシビリティ・ユーザビリティに関わる国際サミット会議)への参加報告として、主に聴覚障害者にとって関わりの深いサービス・商品(ビデオ会議ソフト Hangout、動画サイト YouTube、GoogleGlass 等)のアクセシビリティに関わる機能紹介などを中心に話すとともに、開放的で働きやすいGoogle社の職場環境も紹介されました。

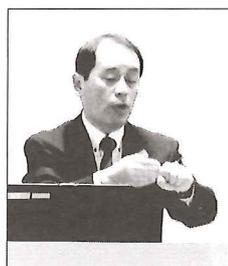
5. 2. 4 パネルディスカッション

「情報アクセシビリティが織りなす社会とは」

・コーディネータ：小椋英子氏

パネリスト：石野富志三郎氏、石原保志氏、関根千佳氏、廣川麻子氏

- ・石野富志三郎氏：一般財団法人全日本ろうあ連盟理事長として聴覚障害者福祉向上のための様々な活動に取り組んでいます。
- ・石原保志氏：長年、聴覚障害教育に関する研究に従事され、現在、国立大学法人筑波技術大学副学長として大学院・情報アクセシビリティ専攻の設立などに尽力されています。
- ・関根千佳氏：同志社大学教授・(株)ユーディット会長として、ユニバーサルデザインに関する啓発・啓蒙活動に尽力されています。
- ・廣川麻子氏：NPO 法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク理事長として、障害があってもなくても一緒に舞台を楽しめるような世の中にするため活動されています。
- ・小椋英子氏：一般社団法人日本手話通訳士協会会長として、聴覚障害者福祉向上のための様々な活動に取り組んでいます。



石野理事長



石原保志氏



関根千佳氏



廣川麻子氏



小椋総合司会・小椋英子氏

・パネルディスカッション概要

まず、石野氏から、「なぜ今、情報アクセシビリティなのか」と題して、聴覚障害者の立場から様々な情報へのアクセシビリティが基本的人権の保障の上で欠かせないこと、そのためにも情報・コミュニケーション法（仮称）などの法的な整備が必要となることの指摘がありました。

次いで、石原氏から、筑波技術大学において新たに大学院・情報アクセシビリティ専攻が2014年4月から開設することになった経緯と新専攻の狙いについての解説があり、「情報保障学」という新たな学問領域の開拓に向けた意気込みが感じられました。

さらに、廣川氏から、英国に滞在した時に障害者が観劇する上で手話通訳・字幕・音声ガイド等の様々なサポートがあることに驚いた経験から、演劇などの舞台における情報アクセシビリティ向上に向けた活動を始めることになった経緯を話されるとともに、今後の展開に向けた展望が述べられました。

最後に、関根氏から、ユニバーサルデザインの概念と情報アクセシビリティとのかかわりについて、海外や国内での様々な事例・動向をもとにわかりやすい解説があり、情報アクセスを保障する法律の制定に向け当事者である聴覚障害者自身の意識も変えていく必要があることの指摘がありました。

各パネラーからの報告の後、パネルディスカッションが行われ、それぞれの立場から様々な質疑や意見交換が活発に行われました。情報アクセシビリティ向上に向けて様々な取り組みが一本の糸のようにつながりあっていくことで、「私たち聴覚障害者にとって暮らしやすい生活」という美しい布が織り上がっていくことを期待させる有意義なものとなりました。



5. 2. 5 「3・11と情報アクセシビリティ」

・講師：田中 淳氏

・講師プロフィール：

国立大学法人東京大学大学院教授として、総合防災情報研究センター長として様々な技術の活用による大規模災害の防災・減災に関する研究・啓発活動に精力的に取り組んでおられます。

・講演概要：

2011年3月11日に発生した東日本大震災において、聴覚障害者を含む多くの障害者が被災した理由の分析・考察を豊富な事例を基にお話しされるとともに、今後も起きるであろう大規模災害時に障害者の被災率を軽減させるうえで情報アクセシビリティ向上に向けた各種施策が欠かせないことを述べられました。身近なテーマであるだけに聴衆の関心も高く、多くの質疑応答が行われ有意義な講演となりました。



5. 3 情報アクセシビリティ・ワークショップ

5. 3. 1 「すべての人にコミュニケーションを保障する政策の推進」

・講師：山田 肇氏

・講師プロフィール：

情報通信アクセス協議会 東洋大学経済学部総合政策学科教授

NTTで研究者として長年過ごした後、2002年東洋大教員に。技術経営、標準化戦略、情報アクセシビリティ等の分野で情報通信が社会に与える影響について経済的、政治的、社会的観点から広く研究されています。

・講演概要：

まず情報社会において高齢者や障害者が情報通信を利用する上で直面する問題点について解説され、それを解消するための政策として標準規格策定の取り組みと公共調達の必要性を紹介されました。公共調達は欧米では進んでおり、日本においても公共調達での義務化を推進する法律の制定を進めるべきだと報告されました。

また、障害者差別解消法施行により公共機関が情報アクセシビリティについて考えるようになることが大切だと話され、非常に興味深いものでした。



5. 3. 2 「緊急通報アクセシビリティへの取り組み」

・講師：中林 裕詞氏

・講師プロフィール：

情報通信技術委員会 緊急通報アクセシビリティワーキングパーティサブリーダー

NTTデータ経営研究所に勤務する傍ら、一般社団法人情報通信技術委員会・緊急通報アクセシビリティワーキングパーティのサブリーダーとして、110や119通報を障害者にも使いやすくしていくための活動に取り組んでいます。

・講演概要：

最初に、緊急通報は音声ならどこからかけてもつながるようになっていますが、音声以外はまだ実現できておらず、音声だけでなく音声以外でも壁のない緊急通報の仕組みを構築していく取り組みを報告されました。

また、仕組みを構築する際、国内だけではなく国際的な標準化を目指しており、そうすることで全世界どこでも壁のない通報ができるようになると話され、標準化の重要性を示させられました。今後普及が期待される電話リレーサービスへの適用も考えられており、大きな期待が寄せられます。



(特別レポート)

「クラウド時代の手話辞典「SLinto (スリント)」と遠隔手話通訳」

・講師：大木 絢人氏、大島 友子氏

・講師プロフィール：

大木 絢人氏

群馬県生まれ。「聴覚障害者と聴者の本当の意味での対等な世の中を作れないか」と考え2008年にシュアール設立、遠隔手話通訳の事業などを手掛けています。

大島 友子氏

日本マイクロソフト株式会社 技術統括室。障害のある人やシニアの方の情報通信技術利用を促進する仕事を担当されています。

・講演概要：

大木氏からは2008年に創業されたシュアールの取り組みを紹介され、続いて大島氏からマイクロソフト社でのアクセシビリティ担当としての取り組みが紹介されました。

その後、大木氏から手話辞典「SLinto (スリント)」を使って手話から検索を行うことができる珍しい機能を説明され、これまでにない辞典の可能性を示されました。また、遠隔手話通訳は公共の場だけではなく社内会議などにも使用されているという話があり、公的サービスにおける適用については慎重な対応が必要ですが、聴覚障害者の社会参加がより一層進むことが期待されます。

大島氏からはマイクロソフト社の手話認識システムによって手話を認識して文字化する仕組みの説明があり、今後技術の進歩により、バリアフリーな社会の構築に貢献されることが期待されています。



5. 3. 3 「アクセシビリティで、誰もが利用しやすい製品・サービスへー日本発、アクセシビリティ (共用品)、世界へー」

・講師：星川 安之氏

・講師プロフィール：

1980年、株式会社トミーに入社、1999年に財団法人共用品推進機構（現：公益財団法人共用品推進機構）を設立、現在専務理事としてより多くの人が使えらる製品やサービスの実現に向けて活動されています。

・講演概要：

ユニバーサルデザインやバリアフリーという言葉がまだなかった時代から共用品という言葉を使い始め、最初は福祉用製品から始まり、さらに一般製品から不便を取り除いたものまで多様な物に使われるようになった経緯が報告されました。

また、様々な不便を取り除くために多くの人たちの声があって良いものになっていったという話があり、声を上げることの大切さが感じられ大変興味深いものでした。



5. 3. 4 「公共交通機関のアクセシビリティ」

・講師： 岩佐 徳太郎氏

・講師プロフィール：

公益財団法人交通エコロジー・モビリティ財団のバリアフリー推進部長として、鉄道やバスなどの交通機関におけるバリアフリー化のための活動に取り組まれております。

・講演概要：

最初に財団の概要から紹介され、次いで交通機関の様々なバリアフリーの例を報告されました。現在は交通バリアフリー法ができ、今後障害者差別解消法が施行されるにあたり合理的配慮をどうすればよいのかというガイドラインをこれから作るという話があり、今後より暮らしやすい社会の実現に大きな期待が持てるものでした。

また、サービス提供者が研修の中で障害当事者の立場になってバリアを実感してもらうことでバリアフリー化する方法を理解させる訓練の取り組みを行うなど非常に実感を伴う効果的な取り組みを紹介されました。



5. 3. 5 「聴覚障害者情報提供施設の取り組み」

・講師： 黒崎 信幸氏

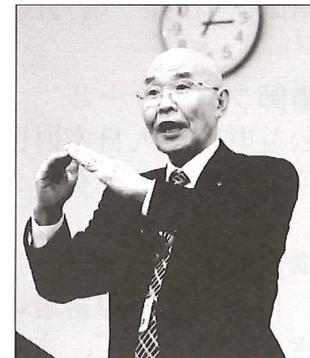
・講師プロフィール：

財団法人全日本ろうあ連盟 元副理事長

特定非営利活動法人 全国聴覚障害者情報提供施設協議会 副理事長

・講演概要：

視聴覚障害者情報提供施設設立が法的に認められてから全国に施設ができていく経緯や施設での事業の内容を報告されました。また、施設が抱えている問題点も報告され、取り組まなければならない課題も多く今後の取り組みの重要性が問われる内容でした。災害時の支援体制や設備の充実にはより多くの人の協力が必要であり、仲間の連携の大切さを強調されていました。



5. 3. 6 「これからの放送におけるバリアフリーの課題」

・講師： CS障害者放送統一機構

・川森 雅仁氏 NTTサイバーソリューション研究所を経て現在慶応義塾大学に所属、放送と通信が連携した環境での情報流通技術の研究開発に携わっています。ITUアクセシビリティ委員会議長

・西滝 憲彦氏 一般財団法人全日本ろうあ連盟 理事 教育・文化委員会 委員長

・川井 節夫氏 一般社団法人全日本難聴者・中途失聴者団体連合会 副理事長

・大嶋 雄三氏 特定非営利活動法人 CS障害者放送統一機構 専務理事

・講演概要：

最初に進行役の大嶋氏から今年で16年目を迎える「目で聴くテレビ」が紹介され、東日本大震災の際はリアルタイムで津波が押し寄せている瞬間を字幕と手話で放送したことが報告されました。また、民放キー局への字幕普及や地デジの問題点なども説明されテレビが抱える様々な問題点を紹介されました。

川森氏からは、IPを使ったデジタルテレビIPTVの紹介及び配信実験の報告がありました。IPTVを使って字幕を重ねることができ、電話リレーサービスなどに活用して利便性を上げることが期待されています。

川井氏からは、IPTVへの期待が話されました。テレビ番組すべてに字幕をつけるのは難しいため、IPTVの活用がより重要性を持ってきます。

西滝氏からは、デジタル放送の場合、チャンネルが余るため、それをろう者のために手話放送に使用したい、IPTVだけでなく普通のテレビ放送でもろう者が知りたい情報が得られるようにしたいと話されました。今後の取り組みに大きな期待が持て興味深いものでした。



5. 3. 7 「情報とコミュニケーションにアクセシブルな社会に向けた取り組み」

・講師：石井 靖乃氏

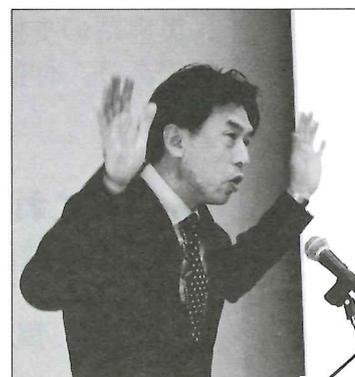
・講師プロフィール：

公益財団法人日本財団において国際グループ長・公益ボランティア支援グループ長として、障害者のアクセシビリティ向上に向けた様々な事業に取り組んでいます。

・講演概要：

日本財団が障害者の情報アクセス向上に向けて取り組んできた事例として、まず国連における重要な文書が国際手話により翻訳される等マルチメディア化してきていることが紹介されました。

次いで、現在日本財団が進めている電話リレーサービス試験サービスの実施状況の報告が行われ、電話リレーサービス普及に向けて潜在的ニーズの掘り起こしや「電話は社会インフラである」という観点からのサービスの公的制度化などが課題になることの指摘がありました。



5. 3. 8 「ここまで来た手話・字幕放送対応技術」

・講師： 比留間 伸行氏

・講師プロフィール：

NHK放送技術研究所 ヒューマンインターフェース研究部主任研究員。「人にやさしい放送技術開発」の一環として、字幕制作技術・コンピュータグラフィックを利用した手話アニメーション技術などを主な研究テーマとして取り組んでおられます。

・講演概要：

字幕制作技術の現状について、特に音声認識を利用したりスピーク方式による字幕制作技術の概要と課題に関する解説などがあり、こうした技術を元にできるだけ多くの番組に字幕をつけられるよう努力していることが報告されました。

次いで、コンピュータグラフィックを利用して手話のアニメーションを作成する研究の現状についての解説があり、自然な表情の再現など様々な課題があるが実用化されれば緊急ニュースの手話による提供にも大いに役立つことなどが報告され、大変興味深いものでした。



5. 3. 9 「アクセシブルな放送へ、そしてユニバーサルな放送サービスへ」

・講師： 吉井 勇氏、佐多 直厚氏

・講師プロフィール：

吉井 勇氏：大学卒業後、養護学校・幼稚園勤務等を経て現在、月刊ニューメディア編集長として活躍中です。

佐多 直厚氏：電通に勤務しながら、字幕付きのテレビコマーシャルに関して早くから取り組んでこられています。

・講演概要：

広告会社として有名な電通がなぜ字幕付きのコマーシャルに取り組んでいるか、手話放送と字幕放送の歴史（手話放送のほうが先に始まっていた）などについて海外の事例もまじえながら、講師お二人の掛け合いでわかりやすく話が進められました。

字幕付きコマーシャルのさらなる普及に向けた取り組みの紹介があり、今後のテレビ放送のさらなるアクセシビリティ向上に大きな期待を持たせるものとなりました。



5. 3. 10 「手話通訳とは～情報アクセシビリティの視点から～」

・講師：米野 規子氏

・講師プロフィール：

大阪府・茨木市の登録手話通訳者として活動するとともに、一般社団法人全国手話通訳問題研究会の理事として聴覚障害者福祉向上のための活動に取り組んでいます。

・講演概要：

聞こえないということはどういうことから始まり、手話の歴史、手話通訳の必要性とその業務・関連する制度などについて具体的な例をあげながらわかりやすい解説が行われるとともに、全国手話通訳問題研究会が全日本ろうあ連盟とともに聴覚障害者の生活向上に向けた活動を推進する上での両輪となること、そのことによって聴覚障害者の情報アクセシビリティも向上していくであろうことを述べられました。



フォーラムの記念切手も頒布されました。

切手の種類

- ①「アクセス君」(情報アクセシビリティ・フォーラムマスコットキャラクター)
- ②「西宮硝子」(講談社少年マガジン連載「聲の形」のヒロイン)

※記念切手1シート(80円切手10枚)



6. セレモニー・主なご来賓

6. 1 セレモニー

フォーラム開催に先立って、テープカットを含むセレモニーを11月23日（土）午前11時より実施しました。

- 11：00 開会あいさつ 司会： 宮本一郎
(一般財団法人全日本ろうあ連盟理事)
- 11：01 秋篠宮妃殿下ご入場
- 11：02 主催者あいさつ
情報アクセシビリティ・フォーラム実行委員会
委員長 石野富志三郎
(一般財団法人全日本ろうあ連盟理事長)
- 11：04 歓迎のことば
情報アクセシビリティ・フォーラム実行委員会
名誉会長 清水 潔 (明治大学特任教授)
名誉副会長 尾形武寿 (公益財団法人日本財団理事長)
名誉副会長 村上芳則 (国立大学法人筑波技術大学学長)
代理：小畑修一 (名誉教授・元学長)
- 11：10 秋篠宮妃殿下おことば
- 11：15 ご来賓あいさつ
自民党衆議院議員 盛山正仁氏
公明党衆議院議員 高木美智代氏
民主党衆議院議員 枝野幸男氏
石狩市市長 田岡克介氏
白山市議会議員 藤田政樹氏
- 11：27 テープカット 9名 (主催者・ご来賓)
- 11：35 秋篠宮妃殿下ご退出
- 11：37 司会：閉会のあいさつ



セレモニーご臨席者

明治大学 特任教授	清水 潔 様
公益財団法人日本財団 理事長	尾形 武寿 様
国立大学法人筑波技術大学 名誉教授・元学長	小畑 修一 様
自民党 衆議院議員	盛山 正仁 様
公明党 衆議院議員	高木美智代 様
民主党 衆議院議員	枝野 幸男 様
北海道石狩市 市長	田岡 克介 様
石川県白山市 市議会議員	藤田 政樹 様
内閣府 参事官 (障害者施策担当)	加藤 誠実 様
外務省 総合外交政策局人権人道課 首席事務官	圖師 執二 様
文部科学省 初等中等教育局特別支援教育課特別支援 教育調査官 (聴覚障害・言語障害教育)	大西 孝志 様
厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 企画課 自立支援振興室 室長補佐	堀内 宏秋 様
国土交通省 総合政策局 安心生活政策課 交通バリアフリー政策室 室長	大熊 昭 様
公益財団法人共用品推進機構 専務理事・事務局長	星川 安之 様
全国中小企業団体中央会 労働政策部長	小林 信 様
一般社団法人情報通信技術委員会 専務理事	前田 洋一 様
一般社団法人日本補聴器販売店協会 事務局長	高坂 雅康 様
国際ユニヴァーサルデザイン協議会 事務局長	川原久美子 様
一般社団法人全日本難聴者・中途失聴者団体連合会 常務理事	小川 光彦 様
一般社団法人全国手話通訳問題研究会 会長	石川 芳郎 様
一般社団法人日本手話通訳士協会 理事	田中 清 様
社会福祉法人全国手話研修センター 理事長	黒崎 信幸 様
NPO 法人CS 障害者放送統一機構 専務理事	大嶋 雄三 様
NPO 法人全国聴覚障害者情報提供施設協議会 副理事長	黒崎 信幸 様
NPO 法人全国要約筆記問題研究会 理事長	三宅 初穂 様
住友商事株式会社 広報部社会貢献チーム	菅谷百合子 様

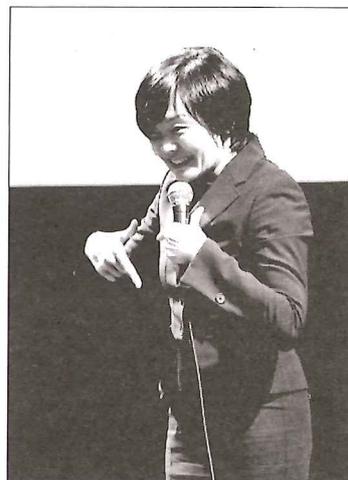
6. 2 主なご来賓

フォーラム各企画に、下記の通り来賓をお迎え致しました。

- ・ 11月22日午後1時～午後3時

映像エリアの初回上映にあたって、安倍昭恵首相夫人にご挨拶頂きました。

また、「小さな下町・さくらの詩」のご鑑賞、ロビーの映像展のご高覧、大館信広監督とご歓談頂きました。



- ・ 11月23日午前10時～10時45分

UDX ネクスト2において、秋篠宮妃殿下に啓発・展示ゾーンをご高覧頂きました。

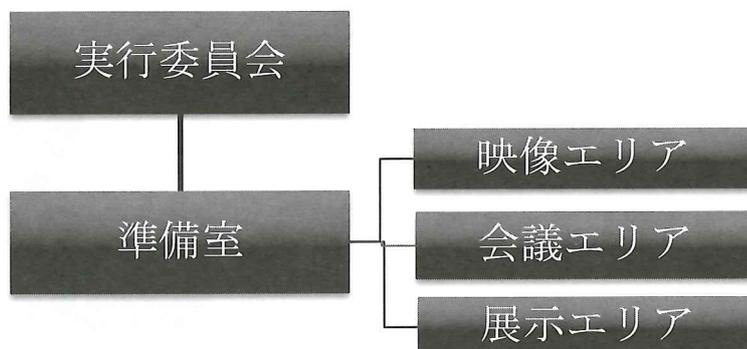
全日本ろうあ連盟・聴覚障害者制度改革推進中央本部・聴覚障害者災害救援中央本部の各展示、電話リレーサービス体験コーナー、盲ろう者体験コーナーをご高覧頂きました。



- ・ 11月24日午後1時10分～2時45分

UDX カンファレンスにおいて、秋篠宮妃殿下・佳子内親王殿下にパネルディスカッション「情報アクセシビリティが織りなす社会とは」をご聴講頂きました。

7. 運営体制



(1) 実行委員会

名誉会長	清水 潔	(明治大学特任教授)
名誉副会長	尾形 武寿	(公益財団法人日本財団理事長)
名誉副会長	村上 芳則	(国立大学法人筑波技術大学学長)
実行委員長	石野富志三郎	(一般財団法人全日本ろうあ連盟理事長)
実行委員	小中 栄一	(一般財団法人全日本ろうあ連盟副理事長)
同上	長谷川芳弘	(一般財団法人全日本ろうあ連盟副理事長)
同上	中橋 道紀	(一般財団法人全日本ろうあ連盟理事 情報・コミュニケーション委員会委員長)
同上	松本 正志	(一般財団法人全日本ろうあ連盟理事 福祉・労働委員会委員長)
同上	西滝 憲彦	(一般財団法人全日本ろうあ連盟理事 教育・文化委員会委員長)
同上	星川 安之	(公益財団法人共用品推進機構専務理事・事務局長)
同上	後藤 芳一	(国立大学法人東京大学大学院教授・ 日本福祉大学客員教授)
同上	石原 保志	(国立大学法人筑波技術大学副学長)
同上	黒崎 信幸	(社会福祉法人全国手話研修センター理事長)
同上	石川 芳郎	(一般社団法人全国手話通訳問題研究会会長)
同上	坂本 輝之	(関東ろう連盟理事長)
同上	宮本 一郎	(公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構 東京都聴覚障害者連盟会長)
同上	石井 靖乃	(公益財団法人日本財団国際・公益ボランティア支援グループ長)

(2) 準備室

準備室長	久松 三二	(常任理事・事務局長)
全体アドバイザー	浅和一雄	(NPO法人エンジョイ・エコ・ラボラトリー)
準備室委員	吉原 孝治	(一般財団法人全日本ろうあ連盟理事 情報・コミュニケーション委員会副委員長)
同上	浅利 義弘	(一般財団法人全日本ろうあ連盟理事 教育・文化委員会副委員長)
同上	小出真一郎	(一般財団法人全日本ろうあ連盟理事 福祉・労働委員会副委員長)
同上	兵藤 毅	(一般財団法人全日本ろうあ連盟 情報・コミュニケーション委員会委員)
同上	井上 正之	(国立大学法人筑波技術大学准教授)
同上	川津 雅弘	(関東ろう連盟事務局長)
同上	長谷川則之	(公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構 東京都聴覚障害者連盟副会長)
同上	佐々木良子	(一般社団法人全国手話通訳問題研究会理事)
準備室会計担当	曾輪信明	
映像エリアプロデューサー	大杉豊	(国立大学法人筑波技術大学准教授)
スタッフ	菅野奈津美、戸井有希、宇都野康子 曾我和子、重田千輝	
展示エリアプロデューサー	浅和一雄	(NPO法人エンジョイ・エコ・ラボラトリー)
スタッフ	新村茂夫、三好邦浩、高田義一、橋口周一郎、 内藤 巧、大西智幸	
国際会議プロデューサー	石井靖乃	(公益財団法人日本財団国際・公益ボラン ティア支援グループ長)
スタッフ	吉田稔、蓮池通子、ジョン・ステファン、 瀧井健次	
国内会議プロデューサー	井上正之	(国立大学法人筑波技術大学准教授)
スタッフ	山下智慎、近藤真暉、稲川直樹、江頭昂史	

(3) 要員

関東ろう連盟、全国手話通訳問題研究会関東班の協力を受け、要員本部（計8名）を編成し、要員協力の募集を行いました。全日本ろうあ連盟青年部の協力を始め、24日の要員には世田谷福祉専門学校の学生12名も加わり、3日間で延べ222名の要員にフォーラム成功のためご協力いただきました。

【要員本部】

部長 川津雅弘 副本部長 桐原サキ

スタッフ 荒井康善、増田伸也、中西潤、柳田美佐、上石栄、相川浩一

【要員配置】

日にち	要員数（延べ人数）	配置場所
22日（金）	35人	通路搬入他5か所に配置
23日（土）	102人	総合受付他11か所に配置
24日（日）	85人	総合受付他11か所に配置

(4) 情報保障

聴覚障害をもつ人も健聴者と同じように情報にアクセスできるよう、手話通訳や文字情報等による情報保障を行いました。

(i) 手話通訳

国際ワークショップ以外の手話通訳は、東京手話通訳等派遣センターに依頼し、延べ56人の派遣がありました。ただし、セレモニーや役職員付きの手話通訳については、全日本ろうあ連盟の職員などで対応しました。

なお、手話通訳時間は、講師等と打ち合わせができるよう開始30分前からとし、時間に応じて複数の会議や講座を担当していただきました。

<セレモニー> 会場=4階 ギャラリー

日にち	時間	人数	担当
23日(土)	11:00~11:30	3人	全日本ろうあ連盟

<映像エリア> 会場=4階 シアター

日にち	上映時間	人数	担当
22日(金)	13:00~15:00	2人	派遣センター
	16:00~18:00		
23日(土)	10:00~12:00	2人	派遣センター
	13:00~15:00		
	16:00~18:00	0人	映像エリアスタッフ
	19:00~21:00	0人	映像エリアスタッフ
	19:00~21:00	2人	東京盲ろう者支援センター(接近手話)
24日(日)	10:00~12:00	2人	派遣センター
	13:00~15:00		
	16:00~18:00	0人	映像エリアスタッフ

<国内会議・ワークショップ> 会場=4階 ネクスト1

日にち	会議時間	人数	担当
23日(土)	10:00~11:00	2人	派遣センター
	11:00~12:00	2人	派遣センター
	12:00~13:00	2人	派遣センター
	13:00~14:00	2人	派遣センター
	14:00~15:00	2人	派遣センター
	15:00~16:00		
	16:00~17:00		
24日(日)	10:00~11:00	2人	派遣センター
	11:00~12:00	2人	派遣センター
	13:00~14:00	2人	派遣センター
	14:00~15:00		

<国際ワークショップ> 会場=6階 カンファレンス

日にち	会議時間	担当
23日(土)	13:00~17:00	キャプショニング・ペガサス

<国内会議・カンファレンス> 会場=6階 カンファレンス

日にち	会議時間	人数	担当
24日 (日)	10:00~11:00	2人	派遣センター
	11:00~12:00	2人	派遣センター
	12:00~13:00	2人	派遣センター
	13:00~14:30	2人	派遣センター
	14:30~15:00	2人	派遣センター

<展示エリア> 会場=4階 ギャラリー

日にち	展示時間	人数	担当
23日 (土)	12:00~15:00	9人	派遣センター
	15:00~18:00	9人	
24日 (日)	10:00~12:30	9人	派遣センター
	12:30~15:00	9人	

(ii) 文字情報

フォーラムの文字による情報保障は、機材等の準備も含め(株)アステムに依頼しました。なお、(株)アステムでは、文字情報保障者を確保するために、遠隔での文字入力システムも用いました。国際ワークショップの文字情報保障者については日本財団よりキャブショニング・ペガサスに依頼しました。

(iii) ノートテイク

展示会場受付の要約筆記については、東京手話通訳等派遣センターに依頼し、展示会場受付で待機しました。延べ4名でした。

<展示エリア> 会場=4階 ギャラリー

日にち	展示時間	人数	担当
23日(土)	10:00~15:00	1人	派遣センター
	15:00~18:00	1人	
24日(日)	10:00~12:30	1人	派遣センター
	12:30~15:00	1人	

(iv) 盲ろう者対応

各エリアに盲ろう者席を設けました。また、映像エリアに申し込みのあった方には事前にシナリオを渡すなど、出来る範囲の情報保障を行いました。

(v) 情報保障機器

会場後方からでも手話通訳が見られるよう、大型スクリーンに投影をしました。また、会場の中程と後方に備え付けのモニターにも文字情報を表示しました。機器の準備及び当日の設置については(株)アステムに依頼しました。

(vi) 磁気ループ

補聴器利用者が、よりクリアな音声を聴くことができるよう各会場に磁気ループを準備しました。

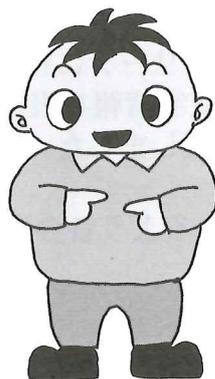
(5) 広報

情報アクセシビリティ・フォーラムの広報活動として、下記のような様々なメディアを通して周知活動を進めました。

- ・ ホームページ、Facebook、ツイッター等のSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）
- ・ ポスター・チラシ・招待券の周知配布
- ・ マスコミ各社、業界紙等、各方面へのプレスリリース・周知

また、グーグル株式会社に「Web スポンサー」になって頂き、ホームページの英語版も立ち上げました。

さらに、フォーラムのマスコットキャラクターとしてナカ・ミチ氏の「あくせす君」を制定し、広報・案内等に活用しました。また、講談社少年マガジンに連載中の「聲の形」ヒロインの西宮硝子のイラストを大今良時氏に描き下ろしてもらい、ポスターや会場のお迎えボードなどに掲載しました。



あくせす君

ホーム
ページ
日本語版

ホーム
ページ
英語版

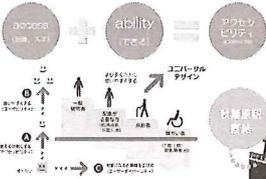
東京・秋葉原で 情報アクセシビリティ・ フォーラムを開催します

近年、障害者権利条約が最も重要な用語として「アクセシビリティ」があります。とりわけ、聴覚障害者の情報アクセスは視覚からの情報が非常に重要ですが、聴覚障害者が抱えているバリアが目に見えないだけに、また市民の十分な理解を得るに至っていません。情報アクセスのバリアフリー化は聴覚障害者のみならず、他の障害者や健常者に対してにも大変有効です。

アクセシビリティの理念を市民に広げるため、現在の聴覚障害者を取り巻くアクセシビリティの啓発事業を行い、情報バリアフリー社会の醸成を目指して行きます。

2013年
11月
22日～24日

会場
東京都千代田区・
秋葉原UDX
UDX Building 2.3



7月発行チラシ

情報アクセシビリティ・フォーラム

音をつかむ 未来をつかむ

2013年
11月
22日～24日

会場
東京都千代田区・
秋葉原UDX
あきはばらユー・ディー・エックス



注：1階～4階は大きな音が出るお祭り
5階～6階は静かな環境をご用意しております

展示エリア
UDX 4階 キヤラー・ネクスト 2.3

2013年11月23日(土) 12:00～18:00
2013年11月24日(日) 10:00～15:00



情報通信展示ゾーン
最新型携帯電話やスマートフォン、タブレット端末、スマートウォッチ、スマートグラス、スマートスピーカー、スマートホームデバイスなど、最新の情報通信機器を展示し、体験・実演を行います。

体験・実演ゾーン
最新型携帯電話やスマートフォン、タブレット端末、スマートウォッチ、スマートグラス、スマートスピーカー、スマートホームデバイスなど、最新の情報通信機器を展示し、体験・実演を行います。

会議・講演ゾーン
最新型携帯電話やスマートフォン、タブレット端末、スマートウォッチ、スマートグラス、スマートスピーカー、スマートホームデバイスなど、最新の情報通信機器を展示し、体験・実演を行います。

映像展示・上映ゾーン
最新型携帯電話やスマートフォン、タブレット端末、スマートウォッチ、スマートグラス、スマートスピーカー、スマートホームデバイスなど、最新の情報通信機器を展示し、体験・実演を行います。

9月発行チラシ

情報アクセシビリティ・フォーラム

音をつかむ 未来をつかむ

2013
11.22(金)→24(日)

会場
東京・秋葉原UDX



声優 少年でガシン・珠姫
[声の形] ヒロインの演義子
(声: 大久保)

聴覚障害者等の通信手段や映画、地上波放送のデジタル化等に伴うテレビ等の字幕や手話の普及は発展を見せています。あらゆる情報への文字や手話による情報アクセスが普及することは聴覚障害者のみならず、他の障害者や健常者に対してにも大きな効果があります。

映像エリア

11.22(金)～24(日)

本フォーラムのテーマに沿って、国内外の映像作品の紹介、解説、上映を行います。



入場には招待券が必要です。

会議エリア

11.23(土)～24(日)

国内外から第一人者をお招きし、様々な講演や討論を行います。



展示エリア

11.23(土)～24(日)

学べる!楽しめる!生活が変わる!
情報通信展示・放送・映像展示・体験・聴覚等最新の機器・サービスの展示や体験等が出来ます。



情報アクセシビリティ・ フォーラム

2013年11月22～24日

主催：一般財団法人全日本ろうあ連盟



会場エリア
開会式・ライブ
22日(金)18時～17時
5ページ

情報アクセシビリティ
カフェ
23日(土)11時～15時40分
6ページ

会議エリア
情報アクセシビリティ
ワークショップ
23日(土)10時～17時
24日(日)10時～15時
7ページ

映像エリア
22日(金)11時～18時
23日(土)13時～21時
24日(日)11時～18時
3ページ

展示エリア
23日(土)12時～18時
24日(日)10時～15時
1ページ

当日配布プログラム

AR 機能：スマホで撮影すると手話による挨拶等の動画が自動再生されます。

[主 催] 一般財団法人全日本ろうあ連盟 <http://www.jfd.or.jp/ja/>
[特別協力] 公益財団法人日本財団/国立大学法人筑波技術大学
[後 援] 内閣府・総務省・外務省・文部科学省・厚生労働省・経済産業省・国土交通省・東京都他

※まずはアプリをダウンロード
iPhone(iOS) / Android(OS)両対応の「Google Play」から「COCOAR」と検索、ハンタマークのアプリをダウンロードしてください。
COCOARのカスタム撮影
ダウンロードしたアプリのホスター全体を撮影(スキャン)してください。



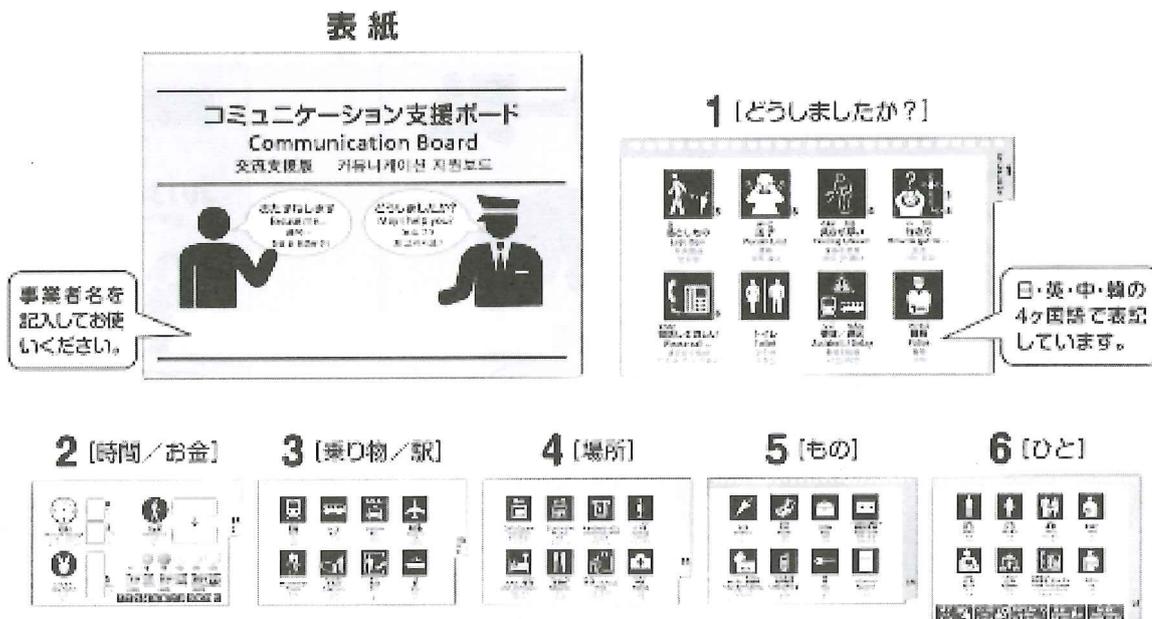
※手話での挨拶動画が再生されます

(6) コミュニケーション支援ボード

コミュニケーション支援ボードとは、聞こえない人に伝えたいが手話が分からない方や話し言葉によるコミュニケーションが難しい方が、イラストを指すことで自分の意思を伝えるツールです。交通関連、銀行などのサービス業、公共機関などで利用されています。

フォーラム当日、関連機関等の方が円滑にコミュニケーション出来るよう、以下のような展開を行いました。

- 11月18日に、JR秋葉原駅、東京メトロ日比谷線秋葉原駅、つくばエクスプレス秋葉原駅、都営岩本町駅、東京メトロ銀座線末広町駅各駅に、ご挨拶し、交通機関用コミュニケーション支援ボードをお渡ししてご活用頂きました。特にJR秋葉原駅には、山手線全駅、新幹線東京駅への情報展開、駅構内にて独自の案内ボードを設置頂く等多大なご理解を頂きました。交通機関用ボードは公益財団法人交通エコロジー・モビリティ財団作成のもので、必要資材等の提供を受けました。



交通機関用コミュニケーション支援ボード



JR秋葉原駅が自主的に作成したオリジナル案内板

・11月12日に、UDX アキバ ICHI 店長会を通して、各店舗にお店用のコミュニケーション支援ボードを配布し、当日活用頂きました。また、当日のフォーラム参加者に、UDX アキバ ICHI 各店舗のパンフと利用者用のコミュニケーションボード（紙）を配布し活用頂きました。

ろう者の意見を反映させた飲食店用のコミュニケーションボードは見当たらなかったため、公益財団法人共用品推進機構のご協力を得て、飲食店用のコミュニケーションボードをデザイン頂きました。改めて関係各位にお礼を申し上げます。



注文をお願いします。

 メニューを見せてください

 単品です  セットにします

 パンにします  ご飯にします

 多め  少なめでお願いします

 おかわりをお願いします

 ホットで  アイスでお願いします

 しょうゆ  ソース  こしょうをください

 お茶  水をください

 おしぼりをください

¥ お勘定をお願いします

 カードで  現金でお願いします

 トイレはどこですか？

コミュニケーション支援ボード（自由にコピーしてお使いください）
 一般財団法人 全日本ろうあ連盟 TEL.03-3288-8847 FAX.03-3287-3445
 公益財団法人 共用品推進機構 TEL.03-5280-0020 FAX.03-5280-2373

 はい Yes 是 예

 いいえ No 不 아니오

 わからない? No Idea 不知道 모르겠다

 はい Yes 是 예



いらっしやいませ

 () 名様ですか？

 混雑のため、ただいま、() 分待ちです

 禁煙席、  喫煙席
 どちらがよいですか？

 カウンター席、  テーブル席
 どちらがよいですか？

 単品ですか？  セットですか？

 おすすめのメニューはこちらです
 ()

 本日の日替わりメニューはこちらです
 ()

 ドリンクは一緒にお出しますか？ (一緒に)
 食事後にお出しますか？ (食事後)

 はい Yes 是 예  いいえ No 不 아니오  わからない? No Idea 不知道 모르겠다

コミュニケーション支援ボード（自由にコピーしてお使いください）
 一般財団法人 全日本ろうあ連盟 TEL.03-3288-8847 FAX.03-3287-3445
 公益財団法人 共用品推進機構 TEL.03-5280-0020 FAX.03-5280-2373

↑
 お店に配布したボード

←利用者配布したボード

8. 来場者アンケート結果報告

(1) 丸印シールによるアンケート

	はい	どちらでもない	いいえ	回答数	はい%	どちらでもない%	いいえ%
◆情報アクセシビリティについて理解が深まりましたか？	360	10	13	383	94%	3%	3%
◆展示エリアの内容はよかったですか？	333	7	11	351	95%	2%	3%
◆今後注目したいというものがありましたか	321	2	11	334	96%	1%	3%
◆新しい方法（ICT）を自分も活用してみたいと思いますか？	288	3	9	300	96%	1%	3%
	単位：人				単位：%		

(2) ポストイットによるアンケート（多数寄せられましたので、主なものを紹介します）

主に内容に関する意見
今回のフォーラムはろう者から聴者へだけでなく、聴者からろう者へということのきっかけになったと思います。情報が近い将来全ての人に分かるように一元化されれば聴覚障害者と関わりたいと思っていてもなかなか踏み出せなかった一歩が踏み出せるようになると思います。技術の発展に感謝！
レスキュー支援が対応している県と対応していない県があるとは驚きでした。
NECはもっと遠隔要約筆記支援システムなど障害者のためにこんなことをしているということ、CM等で国民に認知させて欲しい。健常者に障害者のことを理解してもらおうことがユビキタスへの第一歩になるのでは？
緊急通報はシステムを全国で統一した方がよいのではないのでしょうか。（Web119）
スマートフォンを用いたサービスは似た内容がありました。目に付くようなオリジナリティな機能がもう少し欲しいなと思いました。
緊急通報119だけでなく110も対象に入れて欲しい！
緊急119番関係は統一した方が良い番通報システムを全国的に広めて欲しい。
学会みたいで楽しかったです。3つのエリアが同時進行だったので悩む位でした。次も是非ともこのような場を。
緊急通報・電話リレー通訳 同じような者が一杯。会社も一杯。どれを選ぶか???情報整理が大変。

スターター（スポーツ委員会）がとても良かったです。TVの取材をされてビックリ！！

このようなフォーラムは良かったです。地元でも取り入れて、いろいろな人たちが情報アクセス出来る展示をしたいと思います。

このようなイベント（フォーラム）を毎年1回はやるべき。私たちだけでなく知らない人への普及にもつながる。素晴らしいイベントはもっと定期的にやっていたら多くの人の目に留まり、障害に対しての偏見や批判・中傷を減らすことにつながると思います。全ての人が世の中で難なく生きられる世界になったらいいなと思います。

情報保障をビジネスにしている会社が多く、喜ばしかった。ろう学校にもデモンストレーションに是非お越し頂きたいです。とてもよいイベントでした！

はじめて聞こえない人のイベントなので、少しわかりにくいところもあったが、勉強になりました！！ありがとうございました。♥

筆談器や電話リレーサービスが充実してきていることを知りました。「公的サービス」の考えはあるが、やはり行政窓口でも利用出来るようにして欲しいと思う。

主に今後に関する意見

日々進歩しているので毎年開催して欲しい！

このような企画を1～2年に1回やって欲しいです。新しい情報や機器を知ることが出来て良かった。災害や緊急を知らせる方法をこれから開発して欲しいです。

このようなイベント（フォーラム）を毎年1回はやるべき。私たちだけでなく知らない人への普及にもつながる。

このようにまとまった形での情報展示会が年に一度でもあると良いです。

なぜ東京でやるの？地方こそ必要な情報が欲しいです。ゆっくり聞きたくても人が一杯では落ち着かないです。持ち回りで地方を回って欲しい！



情報アクセスしやすく

聴障者ら1万人超でにぎわう

秋葉原でフォーラム

聴覚障害者が情報を入手して利用できるよう、さまざまな工夫や最新の技術を紹介する

「情報アクセスセミナーイ・フォーラム」が11月22、24日に東京・秋葉原で開催された。全日

本ろうあ連盟の主催で、初の企画に全国から3日間延べ1万3236人が集まった。

「情報アクセスセミナーイ・フォーラム」は、近付きやすさや道具の使いやすさを意味



手持ちのiPadが手書きで筆談できる道具になる

「情報アクセスセミナーイ・フォーラム」では、手話の普及と情報のスムーズな取得をアピールした。

このほか映像エリアでは、日本語字幕を付けたバリアフリー映画

する言葉で、障害者権利条約でも強調されている考え方をフォーラムでは、手話の普及と情報のスムーズな取得をアピールした。

「配慮に欠けた製品があふれている状況を

機器、通信ソフトの販売企業など34社・団体・機関が出席した展示エリアは、「わあ、これは便利」などと大盛況だった。

「配慮に欠けた製品があふれている状況を

タブレット型端末やスマートフォンを持つ人は多く、これにアプリを入れて活用する方法を紹介したブースは特ににぎわった。

「配慮に欠けた製品があふれている状況を

例えば、(株)プラスヴオイス企画・シャムロツクレコード(株)開発の「UD手書き」は、画面に手書きする、話し言葉を音声認識で文字に換える、という簡単な操作を選びコミュニケーションできる。筆記具を持たないが空いた手で手話を交えることもでき、勝手が良いという。

「配慮に欠けた製品があふれている状況を

こうした機能を応用して、聞こえる人と聞こえない人が一堂に会し、それぞれの端末を無線で接続することで会議もできる。

「配慮に欠けた製品があふれている状況を

9. フォーラム開催を報じる報道記事より

変えるには、配慮したし、高齢者や障害者にも使えないと政府が購も使えないものが普及する。障害者差別解消法が制定されたことは希望の光」などと語った。

コラム「時言」 ◎電話リレー

耳の不自由な知人から「聴覚障害者は電話が分からない」と言われ、驚いたことがある。

電話の音が聞こえないということではない。電話を使った経験がないので、それが何なのか、どんなに便利なのか、理解しにくいというのだ。

そんな聴覚障害者も電話を使えるようになるサービスがある。「電話リレー」「代理電話」などと呼ばれるものだ。

1960年代に米国で始まった。当初は、障害者がキーボードで用件を入力し、電話回線を使って送信すると、オペレーターが代わりに電話をかけ、相手の返事を文字で伝える仕組みだった。

近年は、インターネットのテレビ電話を活用。障害者がカメラ付きのパソコンやスマートフォンに向かって手話をし、オペレーターが相手に電話しながら通訳する。

離れた場所にいる聴覚障害者と健聴者が、リアルタイムでコミュニケーションできるようにしたのは画期的だ。

こうした電話リレーサービスは、欧米諸国はもちろん、タイや韓国などでも実現している。ほとんどは政府や通信会社が費用を賄っており、障害者自身の負担はない。

これに対し、日本では、ごく一部の民間企業がサービスを行っているが、公的支援は乏しく、経営は厳しい。利用者の自己負担も軽くない。

全日本ろうあ連盟が十一月、東京で開いた「情報アクセシビリティ・フォーラム」では、各国の専門家が電話リレーの重要性を強調した。「サービスのコストは意外に安い。聴覚障害者がより社会に貢献できるようになる」との指摘もあった。

健聴者にとっても、聴覚障害者に急ぎの電話をかけたり、遠隔地から手話通訳を利用したりできるメリットは大きい。日本でも早急に制度化するべきだと思う。(真)

放送業界専門誌「ニューメディア」メールマガジン 11月26日号より抜粋

11月22日から24日までの3日間、東京・秋葉原の駅前にあるUDXビルでイベント「情報アクセシビリティフォーラム」が開催されました。主催は一般財団法人全日本ろうあ連盟。フォーラムのねらいは、「聴覚障害者の情報アクセスは視覚からの情報が非常に重要ですが、聴覚障害者が抱えているバリアが目に見えないだけに、まだ市民の十分な理解を得るに至っていません。情報アクセスが容易になることは聴覚障害者のみならず、他の障害者や健常者に対しても大変有効です」という考えで、広く市民に聴覚障害の理解を得ることも考えて開催されたものです。

情報アクセシビリティフォーラムの画期的なところは、情報アクセシビリティに関わる機器やサービスを展示して、技術を大いに活用する取り組みを紹介していることでした。展示エリアはUDXビルのギャラリーゾーンを使い、32の企業や団体が出展参加したことです。これまでは「おまけ的な展示」はあったものの、ここまで本格的な取り組みは初めてではないかと思えます。

例えば、NHK技研は手話CGの開発をデモ、字幕CMを取り組む花王もアンケートなどを展開。手話通訳問題研究会が手話通訳の制度化を提案していたり、ろうあ連盟のスポーツ委員会はろう者のオリンピックである「デフリンピック」の日本選手の活躍ぶりと、聴覚障害ゆえの専用器具も展示していました。

「ヨーイドン」のスタート指示は、音声は聞こえないので、赤、黄、青の色の点滅に置き換える装置を展示しながら、ろう者のスポーツ文化も知らせています。ちなみに、デフリンピックは夏季大会と冬季大会があり、競技数は夏季が18で、冬季が5の計23競技で行われているそうです。

また、弊誌の表紙に登場した手話の辞書づくりに取り組むシュワールをはじめ、マイクロソフト、NEC、遠隔の通訳サービスを行うプラスヴォイスなども並んでいました。映画の字幕を音声透かし技術で表示する提案を行うメディア・アクセス・サポートセンターも、具体的にスマホなどに表示するデモがあるなど、ICT技術のサポート力が目立っていました。

『展示会とMICEニュース』 メルマガニュース版 11/27(水)より抜粋

2014年も新しい展示会がいくつも産声をあげますが、つい先日は、秋葉原UDXで開催された「情報アクセシビリティ・フォーラム」という新しいイベントに立ち会ってきました。初回にもかかわらず、展示エリアは通路をひとが埋め尽くし、講演会は満席の大盛況ぶり。

聴覚障害者を対象とした大規模イベントでは、初の試みとあって皆さん開催を待っていました！という勢いを肌で感じました。

2020年にはパラリンピックも開催される東京では、バリアフリー対応やダイバーシティへの配慮、そしてイベントにおける情報保障など取り組むべき課題は多くあります。今回この開催からは、学ぶことがたくさんありました。

速報

初のイベント成功！ 「情報アクセシビリティ・フォーラム」

11月22日～24日、秋葉原で開催

（※アクセシビリティ：年齢や身体障害に関係なく、誰でも必要とする情報等に簡単にたどり着け、利用できるように）

情報バリアの解決を考え 社会への啓発をねらいに開催

（二財）全日本ろうあ連盟は、日本財団や筑波技術大学の協力を得て11月22日（金）～24日（日）に、東京・秋葉原U



I A F セレモニーでのテープカット

DXで「情報アクセシビリティ・フォーラム」（IAF）を初めて開催。のべ1万3236人が参加しました。聴覚障害者が抱えている様々な情報バリアは目に見えないため、市民への十分な理解が得られていません。IAFでは、この問題への解決方法を考え、聴覚障害者の願いを社会に発信し、啓発することを開催のねらいとしています。

期間中は、展示、会議、映像の3つのエリアに分かれてイベントがほぼ同時進行しました。この他、22日晩には手話言語法に関わるフォーラムが同会場内で開催され、いずれも会場内がほぼ満席の状態で開催されました。また、秋篠宮妃殿下が23日のセレモニーにご臨席。翌24日も佳子内親王殿下とご一緒にパネルディスカッションなどを聴講されました。

映像エリア 誰もが暮らしやすい社会を願って



I A F オープニングセレモニーであいさつする安宿首相夫人の昭恵さん

IAFは、22日午後の映像エリアでのオープニングセレモニーから幕開けしました。その後には続く映画「小さな下町」や「さくら」の上映との間に、安倍晋三首相夫人、昭恵さんも臨席されました。昭恵さんが鑑賞されたこの映画は、ろう監督の大館信広さんが東京都の地域協会に依頼されたのがきっかけでろう運動の立ち上げに奔走した黎明期を再現すべく製作した作品です。昭恵さんは、「情報アクセスを円

滑にし、誰もが暮らしやすい社会にしていくことが大事であり、多様性をもった社会こそが幸せな社会であると思う」と語りました。

この他、ろう者やバリアフリーに関わる5つの映画上映と3つの講演（うち1つは2回同じ内容で講演）が進められました。

会議エリア 情報アクセシビリティを語り合う

会議エリアでは、次の3つのイベントが進められました。会場内では、手



これからの放送におけるバリアフリーの課題をテーマにしたパネルディスカッション

話通訳、触手話、要約筆記などの配慮の他、後列の席からも舞台の様子が見えたりと、モニターが配置されました。

①いま注目されている「電話リレーサービス」の今後の普及と定着をテーマにした国際ワークショップでは、国際電気通信連合（ITU）、ヨーロッパ、韓国、タイから招聘した専門家やサービス事業者代表が一緒になって、日本が今後進むべき方向性について討議しました。

②IAFカンファレンスでは、聞けないことがどういうことを考えるテーマから始まり、誰でもアクセスできる社会を考えることをテーマにした

「妊婦なども含めて移動困難な方は全人口のうち1/3以上いる。どうしてもバリアフリーは必要」「世界中の人たちが情報にアクセスできることが大事」「誰もが使いやすい情報発信機器の開発を」「緊急性が高い通報をするためには、シンプルで円滑な操作を」「110番や119番への緊急連絡でなく通常の連絡でも24時間手話での会話が可能になるように」「不慣れが何かを調べ、解決方法を図っていく」「2020年の東京開催のオリンピックまでには誰もが安心して暮らせる社会に」「聴覚障害者情報提供施設は利用者の要求に応え、大災害時の救援拠点となりえる」「普通のテレビで普通に手話放送を楽しむために情報コミュニケーション法の早期実現を」「電話リレーサービスの公的制度化を」「CM内容の情報がより伝わりやすい工夫を」「その人が一番わかりやすい方法での情報提供を」「いろいろな人がいる中でみんなが暮らしやすい社会をみんなで考えていこう（その人抜きに決めないように）」

パネルディスカッションなどがおこなわれました。

③IAFワークショップでは、情報アクセシビリティ等に関わる10本のレポート報告があり、コラムに示すような主なメッセージが発信されました。

展示エリア 最新技術を目にして理解を深める

展示エリアでは、4階にある3つの会場で延べ53社・団体が様々な機器やサービス、活動などを展示して紹介しました。

最新技術を初めて目にした参加者は、聴覚障害者のニーズへの理解を深めていました。

発信された 主なメッセージ

「妊婦なども含めて移動困難な方は全人口のうち1/3以上いる。どうしてもバリアフリーは必要」「世界中の人たちが情報にアクセスできることが大事」「誰もが使いやすい情報発信機器の開発を」「緊急性が高い通報をするためには、シンプルで円滑な操作を」「110番や119番への緊急連絡でなく通常の連絡でも24時間手話での会話が可能になるように」「不慣れが何かを調べ、解決方法を図っていく」「2020年の東京開催のオリンピックまでには誰もが安心して暮らせる社会に」「聴覚障害者情報提供施設は利用者の要求に応え、大災害時の救援拠点となりえる」「普通のテレビで普通に手話放送を楽しむために情報コミュニケーション法の早期実現を」「電話リレーサービスの公的制度化を」「CM内容の情報がより伝わりやすい工夫を」「その人が一番わかりやすい方法での情報提供を」「いろいろな人がいる中でみんなが暮らしやすい社会をみんなで考えていこう（その人抜きに決めないように）」

10. 成果と課題、そしてこれから

情報アクセシビリティ・フォーラム 準備室長
久松 三二
(一般財団法人 全日本ろうあ連盟 事務局長)

11月22日～24日の3日間、東京都の秋葉原で情報アクセシビリティ・フォーラムを開催いたしました。当初は、この期間に多くの参加が得られるか心配しておりましたが、当日、蓋を開けてみましたら、続々と多くの方がご来場され、最終的には延べ13,000人を超える入場者となり、成功裡のうちに終了いたしました。

その後も、マスコミをはじめとした、様々な方からご意見や声をお聞かせいただきました。今般の当連盟のイベントを企画し、きちんと運営されていることに驚嘆されたということです。これまで障害をもつ当事者団体が今回のように多くの方を巻き込んで企画は困難であるという見方が強かったのですが、このフォーラムは「不可能」を「可能」に変えたと考えております。

情報アクセシビリティという言葉は、市民にとってなじみがなく、また理解されにくいものでしたが、このフォーラムをきっかけに、情報アクセシビリティとは何かを理解出来た、また、その必要性や活用方法を考えさせられたという声が多数寄せられました。

また、13,000人を超える入場者のうち、半分近くが若い方々でした。彼らはどちらかという、手話やろう者、聞こえない人が抱えている問題などを深く考える機会があまりないようです。このような若い方々がフォーラムに参加して「共感」を持って頂けたことは大きな成果の一つです。

マスコミの方によると「ろう者、難聴者などのいわゆる情報弱者のための対策は、聞こえる人であっても、子どもや高齢の方等にとっても有効であることをもっと認識してもらえよう、社会を変えないといけない。今まではバリアフリー、ユニバーサルデザインという考え方でやってきたけれども、それだけではないことが理解出来た。情報アクセシビリティが整備された社会になれば、全ての情報が共有され、コミュニケーションも豊かになり、結果的に基本的人権が確立できる」との話でした。

また、出展者や学術関係者にとっても、本フォーラムによって、最先端の技術研究発表の場や産学協同研究等の場としての活用、情報通信技術に関わる技術の発信による学生・関係者の裾野拡大につながったと考えております。

今の社会を変えていくには、当事者の力が発揮できるような環境をまず確保することが重要です。そのためにも周囲の理解を得て、より多くの方と、手と手を携えて取り組んでいくことが、「力」となります。この情報アクセシビリティ・フォーラムはその契機となりました。今後も、頑張っていきたいと思っておりますので、これからもご支援をいただきますようどうぞよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、今回のフォーラム開催にあたっては、ご後援・ご助成頂いた団体をはじめ、聴覚障害者のアクセシビリティを支える関係各所、全国各地のろうあ団体・手話関係団体、とりわけ関東地域の多くの皆様に多大なご協力を頂きました。心よりお礼を申し上げます。

この事業は「全国労働者共済生活協同組合連
合会（全労済）」及び「埼玉県民共済生活協同
組合」の助成によって行われたものです。

情報アクセシビリティ・フォーラム事業報告書

発行 一般財団法人全日本ろうあ連盟
（本部事務所）〒162-0801 東京都新宿区山吹町 130 SK ビル 8 階
電話：03-3268-8847 FAX：03-3267-3445
<http://www.jfd.or.jp/>

2013 年 12 月発行

※本書の無断転載および複製・コピーは禁じます。乱丁・落丁はお取りかえいたします。

